

42153

教科書文庫

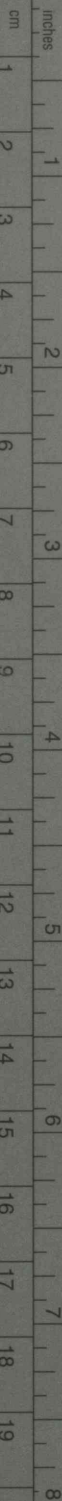
4
810
42-1919
20000 50951

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

375.9  
Yo 19  
資料室

訂女子國語讀本

卷三



資料室  
大正八年二月二十日  
文部省檢定  
高等女子學校國語教科書

3759  
Y019

吉田彌平 篠田利英  
小島政吉 岡田正美  
共編  
訂四 女子國語讀本 卷三

東京 金港堂書籍株式會社

訂四 女子國語讀本 卷三

目次

一	明治天皇の御盛徳	一
二	人の一生	八
三	國民性(口語文)	九
四	千里の春	一七
五	田舎より(候文)	二五
	◎渡 舟(新體詩)	二八
六	潮の岬(口語文)	三一



目次

一

七 露西亞の大野(口語文)……………茅原華山…三六

八 バタの獅子その一……………平野のち…四五

九 バタの獅子その二……………平野のち…四七

一〇 動物の保護色(口語文)……………理學博士 丘淺次郎…五四

一一 珊瑚礁(口語文)……………若林欣…六二

一二 桶 峽(新體詩)……………中村秋香…六六

一三 日本海の海戦その一……………新保磐次…七〇

一四 日本海の海戦その二……………新保磐次…八〇

一五 ◎西郷の象(口語文)……………理學博士 坪井正五郎…八五

一六 須 磨……………新保磐次…八六

一六 須磨明石(新體詩)……………九三

一七 大石良雄と忠僕八介……………文學博士 藤岡作太郎…九四

一八 松平信綱の幼時……………新井白石…一〇〇

一九 花すみれ(短歌)(狂歌)……………一〇四

二〇 養 蠶……………一〇七

二一 雜 草……………文學博士 幸田露伴…一一四

二二 農業の快樂……………徳富蘇峯…一二六

二三 わが故郷(口語文)……………徳富健次郎…一二九

二四 飛驒の山中より留守宅へ(候文)……………遅塚麗水…一三六

二五 大淀川の夜明(口語文)……………徳富健次郎…一三九

二六	青島(口語文).....	一三二
二七	紅蘭女史その一.....	三輪田 眞佐子 一四三
二八	紅蘭女史その二.....	三輪田 眞佐子 一四七
二九	讀書.....	文學博士 坪内雄藏 一四九
三〇	友の不攝生を諫む(口語文).....	一五五
三一	小事とは何ぞや.....	文學博士 澤柳政太郎 一六〇
三二	あげひばり(俳句)(狂句).....	一六五
三三	漢字の音訓.....	一六六
三四	皇室に關する敬語.....	一七五

訂四 女子國語讀本卷三目次終

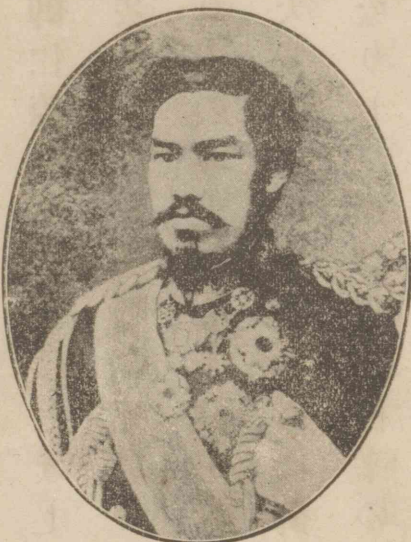
訂四 女子國語讀本卷三

一 明治天皇の御盛徳

明治天皇の御在位四十餘年、内治外交の上に現したまへる大業偉績は申すも更なれば、今、こゝに御日常に於ける一斑をかゝけて、御盛徳の全豹を窺ひ奉るたづきとせんとす。

天皇毎朝五時半乃至六時に御起床ありて、新聞數種を御閲讀あり。八時出御、御机の上に堆く積める文

書を披見して親裁を下し給ひ、詔勅は固より、諸法令には、必ず親署あらせ給ふ。國務御多端の折は、午後一時二時まで御晝食を召させられず。午後四時までは必ず御執務あり。戦時の如きは、深夜まで大御心を注ぎて國政を聽斷あらせられ、而も、つゆ御疲勞の御けしきもあらせず。折々侍臣より御休息の儀を聞え上ぐるに、莞爾として頷かせ給ふのみにて、御勵精聊かも變らせられず。登極の初より、常に民草の榮え賑はんことをのみ軫念し給ひ、避暑、避寒の仰出は未だ曾て一たびもあらせられざりき。



明治天皇

天皇、また、御孝徳篤くおはしまして、御父君の御在位の折は、御幼少ながら、孝順の道を履ませ給ひ、崩御の後、毎年の御祭に如在の誠を捧げさせ給ひき。御

母宮英照皇太后に御孝道を盡させ給ふことも御父帝に對せさせ給ひしに變らせ給はざりき。政務は祖

宗の遺訓に法らせ、國家の大事に際しては必ず勅使をして宗廟に奏上せさせ給ひ、三十七八年の戦捷の

後は、親しく大廟に行幸ありて、奉告の典をあげさせ給ひき。

御仁徳の厚くおはしまし、ことは申すも畏し。天災地變の救濟、戰傷死者の弔恤は更なり、平素民安かれとのみ大御心を注がせたまひ、暴風、其の他、不穩の天候には、中央氣象臺に御使の立ちしこと日に幾回なりしを知らず。行幸の折などには、道路、橋梁、宿驛の事より何くれと御尋ありて、民の時を奪はじの御心しらひ深く、孝子、節婦、高齢者等にそれく、物かつけさせ給ふ。凡そ、其の仁天の如く、其の愛地の如く、

一視同仁、億兆を撫育せさせ給ひしぞ畏き。「世に四恩あり、皇恩を最とす。」といへる、宜なるかな。

御儉徳も亦甚じくおはしましき。さきに宮城の炎上せし砌、新宮御造營にはいたく事をがせ給ひつ。高津宮の故事さへ忍ばれて、いと辱し。毎年帝室の豫算の編制の折には、宮内當局者を召され、祖宗の御祭典、慈惠救濟の費の外、御手許の供御には節約を旨とすべき様御錠あり。宮中の絨毯のいと物ふりたるを新にせんと聞え上ぐれば、其の儀に及ばずと仰あり、御料の汽車の新造にも同じ御事ありしなど、漏

承るだに、涙さしぐまる。

また、夙に文教を興させ給ひて、今は高き學府より山村・漁邑の小學校に至るまで具に備りて、届かぬくまもなきに至りぬ。又、御親らも讀書・講學に心をこめさせ、碩學の士を召して古今東西の典籍を講ぜさせ給ひき。殊に敷島の道に造詣深くおはしまして、萬機繁多なる傍にも、日々數十首の御製あり。積んで六萬餘首の多きに達せりとかや。

又、深く武事に心を留めさせ給ひ、御親ら騎馬の術など勵ませ給ひて、常に玉體を練らせ給ひき。年々陸

海軍の演習を統監せさせ給ふや、或は山野に馳驅して部隊の進退を見そなはし、或は甲板上に雙眼鏡を執りて諸艦艇の動作を凝視し給ひて、數時間聊かの御休憩もあらせられざりき。二十七八年戦役には、廣島なる大本營に出でまして、宵旰帷幄の議を聞召し、戦捷の後は、振天府を宮中に設けて、戦役記念の物を集めさせ給ひつ。三十七八年戦役には、宮廷にましまして、深更まで萬機を親裁し、戦報を聞召し、時に、或は深夜御夢を破りて聖斷を仰ぎ奉ることありても、つゆ煩とし給はざりき。是に因りて、正義の軍の

向ふ所前なく、滿洲の草木君が御稜威に靡き伏し、國光八紘に輝けり。

三千年來日出の地に處を占めて金甌無缺の歴史を有せる我が大日本帝國は、今や、更に時を得て、英華煥發し、日章の旗世界に翻る。これ我が先皇の盛徳に基せざるはなし。あゝ懿なるかな。(皇室及皇族に據る)

### 二 人の一生

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし、急ぐべからず。不自由を常と思へば、不足なし。心に

東照宮御遺訓として世に傳へたるものなり。

望起らば、困窮したるときを思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。勝つことばかり知つて、負くることを知らざれば、害其の身に至る。己を責めて、人を責むるなかれ。及ばざるは過ぎたるよりまさされり。

### 三 國民性

芳賀矢一

我が日本國は、氣候は溫和である、山川は秀麗である、花紅葉、四季折々の風景は誠にうつくしい。かういふ國土の住民が現生活に執著するのは、當然である。

\*東京帝國大學文  
科大學教授、國文  
文學博士、國文  
學者。



四圍の風光の吾等の前に横たはつてゐるものの、凡て笑つて居る中に、住民がひとり笑はずには居られぬ。現世を愛しこの世の生活を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも、當然である。この點に於ては、吾々は天の福德を得て居るといつてよろしい。殊に、日本人が花鳥風月に親しむことは、吾人の生活のいづれの方面に於ても見られる。上代における衣食住は、多くは、我が國土に繁茂して居た植物界から材料を取つた。木材で家を造り、藤葛を以てくゞりつけ、楮でしるたへ、麻であらたへを

作り、草木の汁でそれを染め、蔓草を取つてたすきとした。日本の女の子の著物の模様のはでやかなことは、西洋人の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、それよりもなほ綺麗である。それが、やがて衣服にもうつつて來るのである。昔のしのぶずりも今の裾模様も、つまりおなじことである。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染出した友禪縮緬、襦珍の帯から下駄の鼻緒のさきまで、草木の模様で飾つてある。色合の名稱も、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色など澤山ある。中古の女装束の櫻重ね・梅

重ね山吹重ね等も、四季折々の花に因んだのであつた。

やさしい女流のは、當然ともいはうが、武士の戦争に出立つ甲冑にも小櫻威卯花威澤瀉威などいふがある。いかにも優美ではないか。又、旗やさしものに蝶や笹龍膽や澤瀉をつける。皇室の御紋も菊桐で、徳川家のは葵である。今日の家々の定紋にも桔梗櫻梅鉢牡丹蔦藤松の類が最も多い。

それから、食物の方面でも、名稱に於て、萩の餅牡丹餅を始として、菓子屋の目録を一見すれば、一層その多

いことがわかる。形も、花木に取るのが多い。菓子には別して多い。汁粉には十二月の雅名があり、酒にも櫻正宗菊正宗がある。蓬萊の島臺は今も儀式の時に用ひられ、魚類の料理にも植物を用ひ、牡丹餅を贈るには重箱に南天の葉をしく。その他、庭園の構造でも、室内の裝飾什器でも、家屋の建築でも、すべて植物を用ひ、自然のままの趣味を有して居る。插花の術、箱庭作り、繪畫など、皆我が國人獨得の伎倆で特殊の發達をして居る。すべて、花を活けるにも、これを畫くにも、その生きたまゝ、自然のままにする

のが美しいのである。枝をむしり取つて花ばかり花瓶に挿込むのは、西洋の風であるが、自然の幹枝をそのままに、天地の配合を宜しくあらはすのが、活花でも、盆栽でも、日本人の好みである。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。

我が國の文學に、自然を吟咏したものの多いことは、いふまでもない。繪畫が花鳥を以て優つて居ることや、彫刻も人物よりは花鳥が多く、音樂も人聲よりは自然の音色に近いことなどを考へて見れば、我が

平安朝末期の武  
將  
源平争亂時代の  
武將  
源平争亂時代の  
武將

國の文學が自然美を歌ふを長所とすることがわかる。誠に、上古から近世までの歌題の大半は花鳥風月である。軍記、謠曲、淨瑠璃なども叙景の文を點綴して精彩を生ずる。俳句に至つては、季の無いものは句にならぬことになつてゐるのである。

凡そ、四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことが無い。この四季の景色と人事とを結びつけて感ずることは、即ちあはれを知ることである。源義家や源三位頼政や平忠度等の日本武士として優にやさしく感ぜられるのは、このあはれを知るとい

足利時代の武將

ふことがあつたからである。頼朝も尊氏も秀吉も太田道灌も、暇あるときには、風流の技を翫んだ。日本の武士道は自然の美を愛し物のあはれを解することを一つの要素とする。

英雄豪傑ばかりではない、日本人ほど、國民全體に、あはれを知つてゐる、即ち、詩人的な國民は、恐らく、世界中にまたとあるまい。歌心は誰でもある。歌は作らぬまでも、俳句を作る。上手でなくとも、何人も作つて、花見遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、

詩人的國民はまことに遊事に忙しいのである。

(國民性十論)

國文學者、歌人、明治四十三年歿す

四 千里の春 大和田建樹

春晴千里、山また山、水また水、近き水は澄みて山の緑を浮べ、遠き山は霞みて水と共に藍を流す。此の間に一線を引行くものは何ぞ。一列の汽車、今や、東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫しいだすは、歌か、詩か、抑畫か。  
七砲臺邊、波穩かにして、高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の

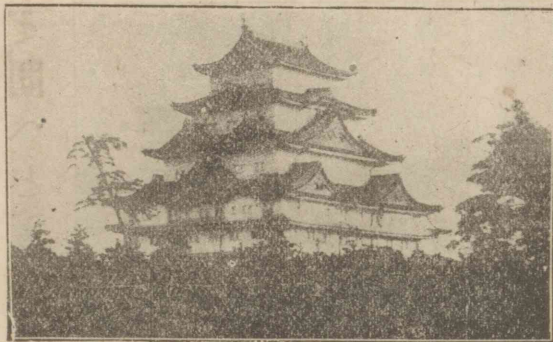
品川の寒場なり

四千里の春

一七

風に飜るに似たり。帆を半ば張りて出て行く舟あり。櫓を操りて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に消えて、探れども見えぬ。松青き處、彩り添ふるに桃の紅なるを以てす。自然は此の美を送りて旅客を慰め、詩人は彼の美を詠じて春に謝せんとす。藤澤の野、山北の谷、人毎に唯美しと叫ぶ。三保の松原、煙りわたりて、春は畫の如し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮立つ雲、何ものか造化の妙技に漏れん。近き舟は逝けども、遠き帆は動かんともせず。杳として認められたるは、伊豆なるべ

し。富士山は水彩畫の如くにして、窓の右に立ち、又左に見はる。



名古屋屋城

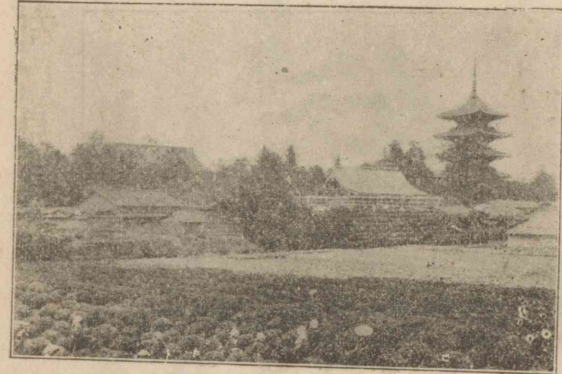
平原十里、麥は綠に、菜花は黄なり。熱田の社を左に見て、春風に吹かれゆけば、名古屋の城はまがはぬ影を見せ初めたり。田夫は金の鯨を指して妻と語り、行商は旅宿の可否を評して、我が好む方へと人を勧む。

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川に横たはりて、

木曾義仲

(三) 鳩の海とも云ふ  
琵琶湖の異名

京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡今は何れの處ぞ、問へども答へず。霞に疊まる、遠近の山、或は淡



東寺の塔

く、或は濃く、鳩の浦風波に眠りて、粟津の松風獨り昔に似たり。東寺の塔は睦まじく我を迎へて立ち、鴨川の水はなつかしく我を迎へて歌ふ。最愛の母に逢ひ、懐かしき友と語るに似たるは、我が京都に暮きしときの而して、年一年、其の感情の深き

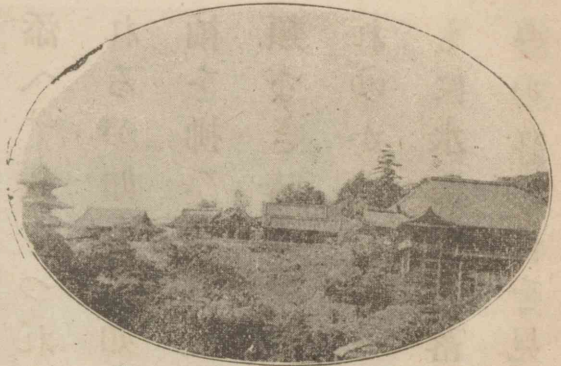
いつもの心地なり。

を加へゆくを覺ゆ。

山紫に水明らかなる處、唯夢の如く、現の如く、三條を渡り四條を渡ること、日に幾たびぞ。躑躅を柴に折添へて載きつれたる大原女も、いつしか我が友とされるが如し。如意嶽より吹き來る春風は軽く我が袖を拂ひ、又、絲長き堤の柳を吹く。

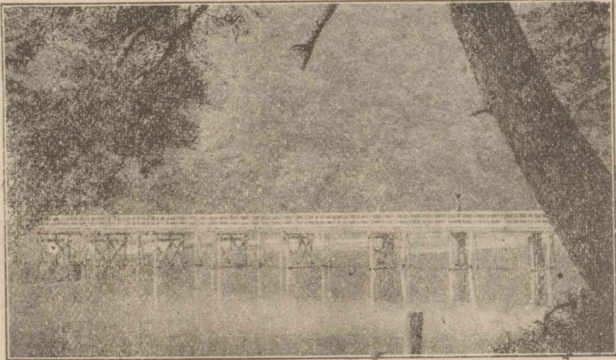
類なき晴天は日々老若男女を誘ひて、西へ東へと群れゆかしむ。さしつゝきたる日傘は橋の欄干とともに水に影を落せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前を滿せ

四條派風の嵩と  
いふこと。貫山  
應舉の門人松村  
吳春此の派を開



舞臺の上より見下す人、舞臺の下より咲誇る花、恰も一幅の四條畫を展べたるが如きに、清の四條畫を展べたるが如きに、水姥は此の間に立ちて、蕨餅召せ堂など呼ぶ。暫し休みて、眺めわらたせば、淺黄に、藍に、霞みわたれる八幡山崎のあたりも面白きに、東寺の塔を松の木の間、墨がきにせる筆こそは殊に巧なれ。西山の花みる人は多く先づ御室を指す。松青く、樓

仁和寺と稱す。



門赤く、茶煙絶えぐに揚がりて、花極めて白し。塔は霞をもれて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯の聲長へに高き梢にあり。重なる岩根を踏みしめて生立つ松、其の間を點綴して咲きほころべる花、嵐山の春こそは今闌なれ。小舟に乗りて漕ぎゆく人あり。岸の此方にて眺むる人あり。一條の渡月

（一）京都西陣にて織出す織物西陣織の義。  
（二）友禪といふ者の工風し出したる華麗なる染模様

橋は錦の袂を載せて、此の大堰川を横ぎれり。坂を登りて大悲閣に至れば、眼下に展げらるゝ一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、恰も西陣を織出だせる如く、又友禪を染めなせるが如し。途に、太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。茶店あれども、客來らず。小女は落花を風に任せて眠り、兒童は仁王門に紙礫を打ちつけて去る。暮色は東山を籠め、叡山を縈りて、やうく鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ。大文字の跡も

姿を隠しぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見るく彩られゆく山影、淡く、濃く、青く、黒く、消されゆく人影、詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和、四望たゞ寂寞。回顧みれば、西山もなく、北山もあらず。（雪月花）

五 田舎より 藤岡作太郎

拜啓。その後、御起居如何に候か。昨秋、一家擧つてこの地に移り候ひてより、往來する友もななく、日々一里の道を學校に通ふのみにて候ひしが、この頃の春の景色に、おのづから心もうき立

\*東京帝國大學文  
科大學助教授、  
文學博士、國文  
學者、明治四十  
三年歿す。



ち候へば、學校の休日毎に、弟妹と共に田野の間を歩き廻り、例の水彩畫をも試み候。最近のもの一枚、小包郵便にて御送り申上候間、御笑覽下され度候。

畫面の内、小川の傍に高き松の聳えたる、その下の藁屋が僕等の住居に候。土橋の上に立ちたるは弟と妹とに候。川の隄の様々の色うるはしきは、若草の中に堇花・蒲公英・蓮華草などの咲亂れたるにて候。その中には土筆も多く生じ、妹などは時々前垂に一杯にして歸り候。隄の

あなたの緑の色濃きは麥畠に候が、まだ穂は出でず候。黄色なるは菜の花の咲満ちたるにて、舞ひをる蝶を招きをり候。

この頃は、野にも畑にも一面に、火鉢の上に火氣の昇るが如くちらくくと動くもの、見え候。これ即ち陽炎に候が、畫にはかけ申さず候。又、雲雀も空高く揚りをり候へども、これも亦畫中には入らず、残念に候。青天に一點の塵と見るほど小さく、聲ばかり大きなるが、やがてふつと啼止みて、逆落しに麥畠のうちに落ち候。山陰の

藪には、今も、鶯囀りをり候。この邊にては、夏の頃までも、かやりに啼續くるよしに候。都の友の消息ゆかしく、上野・日比谷の春色も思ひやられ候。御近況御知らせ下され度候。草々。

◎ 渡舟

坪\*内雄藏

しだれ柳の影ひたす、  
村と村とのさかひ川、  
波があや織る土手際に、  
今日も人待つ渡守。

\*道達と號、早稲田大學名譽教授、文學博士。

雨の日、風の夜、朝夕に、  
渡呼びつゝ、來る人は  
旅あきうどや、村の爺、  
町の女房、役場員、  
竿かたげたる魚釣や、  
獵犬つれたる若紳士、  
西國巡禮、角兵衛獅子、  
郵便配達、小荷駄馬、  
なりも言葉もいろくが、  
暫し乗合ふ舟の中、

知るも知らぬも知りあうて、  
かたる間もなく向岸、  
思ひくにおりたちて、  
西へ東へわかれ行く。

往くを送れば、また来る。

相手は日々にかはれども、

かはらぬ流、同じぬし。

岸の青柳、水の月、

波間の鳥もなじみにて、

春秋いくつかさぬらん。

(國語讀本)

紀伊の南端の岬  
楚人冠と號す。  
東京朝日新聞記  
者

### 六 潮の岬

杉村廣太郎

とかくして、潮の岬の端へ出た。なだらかな高低の  
ついた一面の芝生が見る目遙かに打續いて、其の間  
に薊蒲公英が咲いてゐる。背を屈めたやうな磯馴  
松がぼつりくと處々に立つて居て、それに繋がれ  
た牛の姿が如何にも春らしい。村の少女子が、此の  
芝生で鬼事でもするのか、陽氣な笑ひ聲が遠くで聞  
える。右の方には、燈臺の白い壁が巍然として中空  
に聳え、左には、無線電信局と海軍の望樓とが、さなが

ら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて地骨あらはになつた巖が幾重となく列んで、之に太平洋の大波がどうくくと寄せては返しくしてゐる。

余等は今や日本の本土の最南端の一角に立つてゐるのだ。打開けた太平洋の海面、雲煙淼渺として、其の果て何處としも覺えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は丁度蘭領印度のニューギニアを隔て、濠太利亞の大陸に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて北亞米利加カリフォルニア州のロスア

ンゼルスまで間を遮るものもない。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實、此の一角が即ち日本と世界との接觸する處なのだから、面白い。

まづ、此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。ことに、海軍の望樓に至つては、夜となく、日となく、苟も此の下に船の影さへ見えたなら、内外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては、其の

用向を聞いて、傳ふべき處に傳へる。かく世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々として、其の中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て來たのも無理はない。荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國とも心得てゐるだらう。潮の岬の民は小さいながらも世界の民だなど考へながら、ふと自分の事に氣がつくと、今日は四月の廿二日、去年は愈、紐育の見物を終へて、明日大西洋に乗出さうとした日、一昨年は丁度今頃、巴里から倫敦へ向ふ途中、海峽を過ぎて、ケント州の櫻桃杏梨の今を盛と咲亂れた中を走つてゐた頃で

\*  
明治四十二年

ある。

折しも、望樓で頻りに信號旗を揚げる。それとばかり、友を促して急いで見に行けば、望樓長は芝生に立て、ある望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ、下げよ、と忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ぱちくぱちとけたましい音を立て、電信をかけてゐる。今まで静まり返つてゐた此の日本の最南端の一角は、俄かに色めき立つて見えた。沖には通報艦の「淀」が行く。(へちまのかほに據る)

七 露西亞の大野

茅原華山

\*名は廉太郎、新聞記者、黒海の西北岸にある露國の都府、露國の首府、大正三年ベテログラードと改名せり。

オデッサで、<sup>セントピーターズブルグ</sup>聖彼得堡に赴く三等の切符を買つて來い。とホテルに命じた。ホテルの者は變な顔をしたが、委細かまはず三等汽車に乗込んだ。英國の三等汽車と違つて、敷物もないのには、先づ驚いた。次に、汽車の堅固にして巨大なるに驚いた。流石に露西亞式である。

汽車の窓から首を出して、最初に得た感じは、如何にも平かな國であるといふことである。謂はゆる天如穹廬掩四野キミラ、オマシといふのは、もつともよく露西亞の天

地を形容して居る。左の窓から首を出しても平野である、右の窓から首を出しても平野である。蒼々たる天が全く天幕のごとく圓く四野と接觸して居る。何時間走つても、何日走つても、眼の覺めたときに首を出しても、夕日が入るときに首を出しても、何時でも、平らかである。山もなければ、丘もない。露西亞は水の海でなく、土の海である。土より他に何も無い。而も、其の土は極めて平らかなのである。露西亞が一大農國であるのは偶然でない。然り、最も平凡なる農國である。露西亞に遊ぶ者は第一に

露西亞の西南部に  
西北より東南に  
流れて黒海に  
入る大河。  
露西亞の中部より  
南に流れてア  
ソフ海に入る大  
河。

自然の平凡なるに驚く。平凡も此處に至つては奇絶といはねばならぬ。此の平凡的奇絶の國は、其の地理上の位置からいへば、歐羅巴に於ける滿洲である。支那本部には黄河あり、揚子江あり、又、運河がある。露西亞には、幾多の河川あるにも關らず、支那に匹敵すべきものがない。黄河、揚子江は文明を生じたが、ドニール河やドン河は決して文明を生じない。是地が北に偏して、形勝を占めて居ないためである。露西亞は、その北半を材木國といふことが出来る。

黒海の西北、露西亞の西南隅の州、オデッサはその首府。  
ベサラビアの東北に近き州。  
キエフの東北に近き州。

清の乾隆頃の人

らば、その南半は穀物國といふことが出来る。南半は實に歐洲の穀倉であつて、ベサラビア・キエフ・チェルニホフの三州さへ實れば、全歐洲に小麥を供給することが出来るといふ。北へ行くに従つて森林が漸く多く、趙甌北の語を藉りて言へば、樹海である。従て、各停車場には、新に伐出した材木が山をなして居る。日露戦争の際、列車を極東に送り放しにして、之を薪にして平氣であつたのは、いかにもと、始めて合點された。由來、露西亞人は遠いといふことを知らぬ民である。

\*ほとゝぎす自由  
自在にきく里は  
云々(つぶり光)

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里」といふが、露西亞は中々そ  
んなことではない、隣の村に行くにも泊りがけてあ  
る。日本では、汽車で旅行するにも、三時間とか五時  
間とかいふのであるが、露國では、さうは行かぬ、きつ  
と、汽車の中で泊る覺悟をせねばならぬ。露西亞人  
が遠いといふことを知らぬのも無理はない。遠い  
といふことを知らぬから、人間がのつそりとしての  
んきなのも當然である。

従て、歩くのにも、日本人のやうに性急ではない。し  
かしながら、日本人のやうに路傍の青草に戯れると

いふことがない。紅なる花もなければ、緑なる柳も  
ない。松の並木の間に隠見する富士の山もない。  
日本人は急ぎながらも路草をする、景色に憧憬れる、  
俳句の一つもひねつて見ようとする。單調な自然  
の中に住する露西亞人はまるで反對である。のつ  
そりと歩きながらも、決して左右をふりむくといふ  
ことをしない。ふりむかしむべき佳麗な自然がな  
いからである。

露西亞人は日露戦争位に負けたからとて、心に報復  
を思ふ程の神経過敏な人民ではない。露西亞人は



大の大なるを知りて、小の亦大なるを知らない。それ故、計畫は非常に大きい、が仕上は極めて粗漏である。一體、支那の美術を見るに、どうも大陸的のところがある。露西亞人の顔の結構にも、どことなく大陸的のところがあるから、妙だ。

佛蘭西人が刀を見ては、斫られぬ前から血を流す人民であるならば、露西亞人は、斫られてから後に、「おや、痛いぞ。」と感ずる人民である。従て、彼等は勝つたからとて無暗に乗氣にもなるまいし、負けたからとて俄かに士氣の沮喪するやうなこともあるまい。露

西亞人はどこまでも大陸的だ。

試みに立つて視線を凝せば、露西亞の野はたゞ天地の相合するを見るのみである。日は地平線より出でて、地平線に入る。露西亞人が大陸的であると同じ時に、單調病に囚へられて居るのも、已むを得ぬではないか。單調病患者は、動もすれば、其の單調を破らんがために、極端より極端に奔る。或時は極めて平和的で、或時は極めて好戰的で、或時は極めて悲觀的で、或時は極めて樂觀的で、或時は極めて眞面目で、或時はまるで遊蕩兒的で、其の深切なる時は菩薩も跣

足で逃げ、其の残酷なる時は夜叉も三舎を避ける。英吉利や佛蘭西や日本の標準を以てこれに臨むのは間違である。急速な華麗な五彩燦爛たる進化はかゝる大國には容易に求められない。露西亞はどこまでも依然國である、不老不死の國である、泰然自若國である。

かくて、三日三晩ばかりの苦みで聖彼得堡に着いた。時は五月であつたが、子ヴァ河にはまだ氷が張詰めて居つた。(海外文章)

\*聖彼得堡を貫流せる川。

(二) 前東京女子高等師範學校教授

八 バタの獅子その一 平野のち

玉は砂礫にまじりて玉人を待てり。世に尊び重んぜらるゝ人はたかくの如きか。俊秀は多く陋巷に生れて、自ら人にぬけいでたる所あり。切磋琢磨の功を経れば、完き璧となりて、遂には世の光とかゞやき、國の寶と尊まるゝに至るべし。

今は昔、伊太利の或町に、アントニオ、カノバといふ小童ありけり。早く父に別れしかば、祖父母の手に人となりしが、祖父は石工にて、家道豊かならざりき。アントニオは生來虚弱なりければにや、世の常の童

1770—1832

の如く、友どちうち集ひて嬉戯するを好まず、常に祖父に石工場に伴はれて、鑿と槌とに親しむを上なき樂とせり。あはれ、老石工の作業の餘念もなきかたはら、堆き石のほとりにありて、或は粘土を以て小さき像を作り、或は物の形を石片に刻める幼童のさまの、いかにさかもげに、ちうたかりけん。かくて、此のちひさき手に作れるもの、おのづから形ととのひてめでたかりければ、祖父母はいたく喜びて、彫刻家とよびならしつゝ、行末を樂しみて、鍾愛すること一方ならざりき。殊に、祖母は、さるたぐひ

の人に似ず、みやび心あるものなりければ、ゆふべの圓居には、この童を膝に近づけて、花鳥を始め、世にうるはしきくさぐさのものの物語しいて、其の面影を幼心に忍がけるに、あけの日になれば、やがて其の心の畫は、小さき指端にほとばしりて、或は粘土に、或は石片にあらはされけりとかや。

九 バタの獅子その二 平野のち

同じ町に伯爵某といふ人ありき。家富榮えしかば、をりにふれては盛宴を張り、遠近の友を招きけり。

アントニオの祖父は料理の業にも堪能なりければ、さるをりくは此の家に招かれて厨に立働くを常とせり。

或日例の如く饗宴の催あり。アントニオも祖父に従ひ行きて、料理こそ心得ざれ、食器の洗滌拂拭等を助け、何くれとなくまめやかに働きぬたり。時とかくするほどに、やうく饗宴の時刻も近づきぬ。いまは食卓の裝飾の最中なるべしとおもはるゝ頃、ふとそなたに物の破壊する音しつ。何事ならん、たゞ事ならじと怪しめるをりしも、一人の僕、手に大理石の

破片を持ちて厨に來りぬ。いたく顛ひをのゝきつ、顔の色は土の如くなり。さて、いふやうおのれ大きなる過して、食卓に飾るべき像を破りつ。主人もし聞き給はゞ、何とかのたまはん。あゝ、わが罪のさり所なきを如何にせん。といふに、人々も、これなくては饗應の筵もいと淋しかるべし。とて、主人の怒のほどを思ひやりつゝ、せんすべ知らず惑ひけり。をりふし、アントニオはながしのもとにて鍋など洗ひ居たりしが、これを打ちすて、其の惑へる人々のもとに至りて、いふやう、これにかはるべき品あらば、

食卓を飾りうべきか」といふ。人々は答へて「それはいふまでもなし。其の大きさにふさはしくば」とい



子 獅 の タ バ

試みしめ給はずや」といふ。人々うち笑ひて「あなを

ふ。アント  
ニオこれを  
きゝて事も  
なげに「おの  
れさるべき  
ものを造り  
いでてん。

かし。何の夢みてたはごとといふぞ。」と嘲りゐたりしが、僕の中にアントニオの平生を知れるものありて、「とにもかくにも其の詞にまかせんは如何に。」といひいでけり。もとより、さるをりから、外にすべき方も覚えざりければ、其の詞にまかせつ。さて、厨には、今日の調理の料として黄金色の新しきバタの、凡そ三百斤許なる大塊あり。アントニオはこれを請求めて、料理用の庖刀を以て、やをら刻みはじめしが、しばしありて、バタはたけき獅子の奮迅せんとするやうなる形になりぬ。さきに嘲りしもの

どもうちよりて、其の巧なるにおどろきつゝ、なかなかにもとの像にまされり」とて、痛く嘆賞せり。かくて、定めの際になりたれば、伯爵は客人を案内して食堂に入りしが、まづ人々の目を惹きしは黄金色なる獅子なりけり。いづれも「こは大技術家の手にこそなりつらめ。特にバタを用ひたる所いと興あり。さるにても、この大技術家は何處の誰ぞ。」とて賞讃の聲を止めず、口々に其の技術家の名を問ふに、主人も「方々の驚かるゝやりに己も驚き居るなり。」とて、僕頭を呼びて、「この美しき像はいかにして手に入

りしぞ。」と問ふに、「やうく今一時間許前につくりいでたるなり。」とて、ありしことどもをつぶさに聞えければ、主客の驚嘆一入なりき。主人やがて小童をまねきて、其の名と師とを問ひしに、「名はアントニオ、我が師は石工なる祖父。」と答へしのみ。客はこのくすしき幼年技術家を圍みて、その技を賞し、とりあへず食卓につかしめて、そのために祝杯を擧げたり。後、伯爵はアントニオをその家にひきとり、國內のすぐれたる技術家を招きて、その師となし、かば、おの

づからそなはりたる天才はますく、發達して光を  
放ち、翌年になりては、國內にならぶものなきに至り、  
祖父母の呼びならしけん彫刻家は、今は大彫刻家  
として世界にかゞやきいでたりけり。

\*東京高等師範學  
校教授、理學博  
士

一〇 動物の保護色

丘 淺次郎

動物にはその住する場所と同じ色を有するものが  
頗る多い。緑色の若芽に附く蚜蟲アヘムシは必ず緑色で、黒  
い枝につくものは黒く、楓の赤い芽に附くものは紅  
色である。單に色ばかりでなく、木の幹にとまる蛾

の類には、斑紋まで木の皮と全く同様で、近づいて見  
ても見分けられぬ程のものがいくらかもある。種々  
の動物に就いて廣く調べて見ると、動物がその住所  
の色に似るのは殆ど規則であつて、似ないのは例外  
かと思はれる位である。  
緑葉の上にとまる動物は雨蛙でも、芋蟲でも蝗カマキリでも、  
蜘蛛でも、皆緑色で、枯草の中にある蝗などは枯草色  
である。沙漠地方に住む動物は獅子、駱駝、羚羊ヒツジの類  
を始として、獸でも、鳥でも、虫類でも、一樣の黃砂色を  
有するものが多い。それ故、樹木、岩石等の如き隠れ

場所がないのに、此等の鳥獸を見分けることが中々困難であると、旅行者が紀行中に書いてゐる。北極地方へ行くと、概して白色の動物が多く、始終雪の絶えぬ邊には、常に白色を呈する白熊、白梟の類が住み、夏になれば雪の消える處には、冬の間だけ白色に變ずる雷鳥、白狐、白鮎の類が居る。鰈比目魚、こちかぎ、みなどは、浅い海底に砂に半分埋もれて棲んでゐるが、背面の色も模様も全く砂の通であるから、足もとにゐても少しもわからぬ。水族館などに飼つてあるのでも、餌を與へると泳ぎ出す

ので、そこにゐたのが僅かに知れる位である。南洋の海にゐる海藻魚の如きは、色が海藻と同じであるのみならず、身體の周邊からびらくした附屬物が生じてゐるから、海藻の間に静止してゐるときは、到底之を識別することは出来ぬ。又、海面には、透明である爲に容易に目に觸れぬ動物が頗る多い。風のない静かな日に小舟に乗つて沖へ出て見ると、海の表面には、海月の類、蝦の類が無數にゐて、中には一二寸位から一尺以上に至るものもあるが、餘り透明な爲に、目の前にゐても、中々氣の附かぬ位である。



斯くの如く、多くの動物は各、その住む處に應じた色を有し、そのため中々之を見出すことが困難であるが、この事は攻めるにも攻められるにも、その動物自身から見れば、極めて利益の多いことで、敵である動物から見れば、甚だ迷惑なことである。攻める上からいへば、餌となる動物が知らずに近づいて来る故、容易に之を捕へることが出来る。又、攻められる上からいへば、己がそこにもても敵が知らずして通り過ぎるから、その攻撃を免れて身を全うすることが出来るが、兩方ともに敵となる側から考へれば、これ

と利害が全く相反するのであるから、極めて不利益なことと相違ない。されば、動物の色がその住處の色と同じであることは、攻撃の方便としても、又、防禦の方便としても、その動物自身だけには頗る利益のある性質といはねばならぬ。

又、ある動物になると、たゞ色模様が似るのみならず、身體の全形までが或ものに似て、到底識別が出来ぬ程である。その最も有名な例は琉球邊に産する木葉蝶、内地到る處に産する桑の枝尺蠖、南洋諸島に産する木葉虫などである。木葉蝶は翅の表面は美麗

な色を有するに拘らず、裏面は全く枯葉の通りの色で、翅の全形も木の葉と少しも違はず、葉脈の通りの模様まで備はつてゐる故、翅を閉ぢて木の枝にとまると、中々見出せるものでない。先年、ある人が此の蝶の翅を閉ぢたまゝの標本を林檎の枯葉の附いた枝につけて、硝子箱の中に入れて、大勢の人に見せた所が、誰もこれに氣附かず、程過ぎてから、僅かに一人が蝶の頭と觸角とを見附けて、この枯葉の下に蝶がゐると叫んだ。所が、焉んぞ知らん、その枯葉といつたのは、實は蝶自身の翅であつたのである。

又、桑の害虫である尺蠖は色も形も眞に桑の小枝の通りで、人間も是には常に瞞される。總べて斯様な虫類には、自分の色と形とが植物に似てゐることを十分に利用する本能が備はつてゐるもので、此の虫なども、體の後端にある二對の足で桑の枝にしつかりとつかまり、身體を一直線に延し、恰も小枝と同じ位な角度をなして立つてゐて、容易に動かぬ。なほ口からは細い糸を吐き、之を以て頭と枝との間を繋ぎ、成るべく疲勞せぬやうにして、長い間少しも動かずにある。夫故、農夫なども、之を眞の小枝と誤り、持

つて來た土瓶などをこれに掛けて、わることが往々あるといふ。この位に小枝に似てゐる故、鳥類がこれを見つけて食ふことは中々容易でないのである。

(進化論講話)

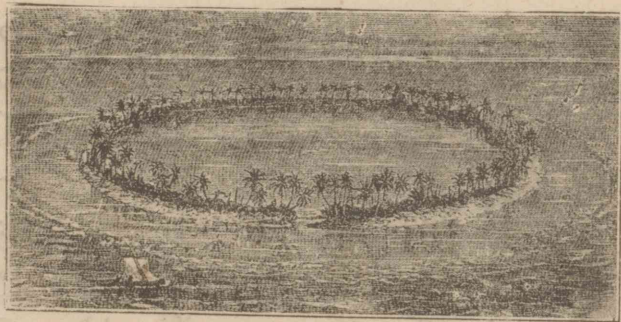
\*海軍中佐

一 珊瑚礁

若\* 林 欽

予が始て珊瑚礁を見たときは、其の奇妙な美しさに驚いた。南洋の廣い海上において、各島の周圍には海岸より一二海里づゝ隔て、環礁がある。波が之に當つて礁上十尺以上十五尺の水が常に迸り立ち、

礁内は波が平かて、さながら防波堤を周したやうで



珊瑚礁

ある。水の綺麗なため、船上より海の底を精しく視ることが出来るが、海の底の全面は悉く珊瑚礁を敷き詰めて、各種異様の形と色とを現し、大小多くの魚族が其の間に泳いで居る。其の光景の美しさは實に言語に絶してゐる。

珊瑚島は日光を受くることが強烈であるが、風が絶えず吹き、珊瑚の聳えた礁の上に

は波が常に白い珠を降らし、日光が之に映つて時ならぬ虹を生じて、見る目が非常に愉快である。礁内に入ると、水面は鏡の如く、水の色は澄んで、さながら水晶を透して海底を見る様である。浅く見えるが、其の實は大に深いのである。何處の植物園にも、此處の海底に見る如き奇態な、美しい、鮮やかなるものはあるまい。珊瑚礁は或は灌木の如く、或は麥の穂の如く、或は葦の如く、或は鹿角の如く、或は甘藍の如く、無數の珊瑚蟲を其の上に載せ、綠・紫・黄・褐色又は、眞白な美しい房を現出して居る。

而して、其の間に大小各種の貝殻が散布して居る。殊に珍しいのは大蛤で、最も大なるものは重さ百斤に達するものがある。此の大蛤の半ば開ける口の中に多くの魚が這入つたり出たりして、平然と泳ぎまはつて居る。又、美しい鯛を始め、色々の魚が、深い淵より跳り出でて、首尾相接し、愉快に、活潑に運動して、其の美麗を誇る有様は、實に人目を眩くらするばかりである。

斯くて、永く海の底を瞰いて見て居ると、何人も造化の、あらゆる生物に幸福を授け給へる仁愛の心の、深

く且大なるを知ると同時に、各自自己の境遇に満足  
しなればならない事を悟るであらう。(面白い科學の話)

(一) 愛知縣愛知郡  
有松村

一二 桶 峽 中 郵 秋 香

天地に轟くはた、神  
篠を束ねて降る雨を  
神の祐と唄つたひ、  
銜を包み、草摺まきて、  
攻入る必死の三千騎。

(二) 國文、  
宮内省、  
人、明治四十三年  
歿す。

(一) 尾張國愛知郡香  
掛村  
(二) 尾張國知多郡大  
高村  
(三) 尾張國愛知郡笠  
寺村

(四) 尾張國西春日井  
郡清洲町

香懸、大高笠寺の  
野にも山にも満ちみちたる  
四萬五千の駿河の軍勢。  
明日は清洲を攻落し、  
決河破竹のいきほひにて、  
尾張の國を定めんと、  
心驕の酒うたげ。

「松の嵐は琴のしらべ、  
鳴神のおとは鼓のひびき、

よに心地よきうたげや」と、  
 佩きつる太刀の緒うち解けて、  
 歌ひつ舞ひつ諸共に  
 興たけなはなる折しもあれ、  
 四面に起る鬨の聲。  
 すは敵ぞ、といはせもあへず、  
 雨よりしげき寄手の槍先、  
 嵐をしまく敵の太刀風。  
 天たちまち覆り、地みるく裂け、

きらめく稻妻光のひまに、  
 二千餘人の玉の緒は  
 草葉の露と消えにけり。  
 あゝ定めなき人の世や。  
 あゝ頼まれぬ人の身や。  
 さもいかめしく轟きし  
 名は、とぎの間のはたがみ。  
 夢の名残の松風も  
 昔のあとやたづぬらん、

五月雨寒き桶はざま。(新體詩歌集)

前高等師範學校  
教員和漢文學者

明治三十八年

一三 日本海の海戦その一 新保磐次

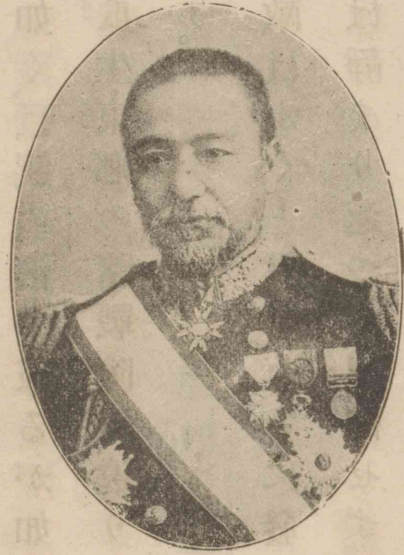
さる程に、五月二十七日の曉天に、假裝巡洋艦信濃丸の無線電信は、敵艦隊見ゆ。敵は東水道に向ふもの如し。と報ぜり。全軍これを聞いて、踴躍し、各豫定の持場を固めたり。午前七時、哨艦和泉も敵を發見して、其の勢力陣形針路等を本隊の旗艦三笠に報じ、其の儘、敵の艦隊と接觸を保ち、時々刻々の動靜を報じつゝ、北東さして進航せり。

\*肥前國宗像郡に  
屬す。

此の日、海上濛氣深くして、五海里以外は黑白も見えわかざりしかば、敵はこれを幸に、我が艦隊の目を暗まして浦潮の方に遁れんと思ひしに、我が諸艦の報告によりて、數十海里を隔てたる敵の進退動靜の一我が旗艦に映ずること、鏡をかけて見るが如くなりき。沖の島に至るまでは、兵士皆戦闘配列に就きながら、隨意休憩を許されたるが、準備終りて、上官の巡視せし時には、兵士等砲彈等を枕にして、鼾の聲雷の如くなりき。古今の大戦を前に控へて敵前にありながら、物とも思はぬ、この沈着なる膽勇を見て、司

令官を始め、人々深く嘆稱し、「軍にははや勝ちぬ」と頼もしく思ひけり。古今の大戦を前に見れば、かくて、我が本隊は午後二時沖の島附近に敵を迎へ、遙かに彼方を見渡せば、豫て諸艦の報せる如く、敵は二列縦陣にして、主力の四戦艦は右翼の先頭にあり、司令長官の旗艦スワロフ真先に進み、又、オスラビヤ以下の四戦艦は左翼の先頭たり、海防艦巡洋艦特務艦船等次第に濠氣の中より現れ出で、其の長さ數海里に互り、實に世界の壯觀なり。午後二時に近く、戦機已に熟しぬ。旗艦三笠の檣頭に大戦闘旗の颯と

翻るや、戦闘の號音勇ましく、旗艦は全艦隊に對して、皇國の興廢此の一戦に在り。各員一層奮勵努力せよ。



東郷大將

と、信號旗を掲揚せり。この信號はネルソンがトラファルガルの海戦に、英國は諸君の努力を要求す。と信號

せしと同じく、忽ち世界に傳誦せられたり。こゝにおいて、我が主力隊は東郷大將直率の主戦艦

英國の提督、西  
紀一八〇五年十  
月二十一日、ス  
ランス、イース  
ニアの聯合艦隊  
を滅して、戦  
死す。  
ジブラルタル海  
峽の入口の西北  
に在る岬。



(一) 上村彦之丞  
 官、海軍中將  
 (二) 出羽重遠  
 第一戰隊司令官、  
 海軍中將  
 (三) 瓜生外吉  
 第二戰隊司令官、  
 海軍中將  
 (四) 東郷正路  
 第六戰隊司令官、  
 海軍少將

隊を先鋒とし、上村中將の装甲巡洋艦隊これに續き  
 て、吉例の單縱陣を布き、正にこれ大鵬の雲に翰つが  
 如く、巨鯤の浪を破るが如く、驀地に敵前に出て、出羽  
 瓜生東郷の諸戰隊は、遶りて敵の後尾を衝かんとせ  
 り。  
 敵はかくと見て、直ちに發砲を始めたれど、我が艦隊  
 は靜まり返つて、應砲せず。射距離六千米突に入る  
 や、斜に敵の前頭を横ぎりて敵と丁字を成せる我が  
 主力隊は、茲に一齊に敵の兩先頭艦に砲火を集中し  
 たらば、敵の諸艦も劣らじと應戰し、砲聲天地を碎く

がごとく、海水湯の如く沸返れり。此の日、西風烈し  
 くとして、砲烟海面に漲り、濛氣と相合して四顧冥々た  
 り。物凄きこと言ふばかりなし。されども、我は陣  
 形の優越なると技術の熟達せるとによりて、砲彈殆  
 ど百發百中にして、敵の左翼先頭艦オスラビヤまづ  
 大火災を起して戰列を退き、續いて、旗艦スワロフ二  
 番艦アレキサンドル三世も火災を起して列を離れ、  
 後續艦も亦續々と火を失せり。東郷大將は後日に  
 至りて、勝敗已に此の間に決せり」と報告せり。  
 哨艦和泉は初より敵艦隊と觸接を保ちて來りしが、

天正年間、徳川家康織田信雄を援けて尾張國長湫に豊臣秀吉の軍と戦ふ。  
徳川氏創業の名臣、家康四天王の一人

砲戦始ると見るや、急に艦首を回らして、敵の砲火の集中するを物ともせず、獨力應戦して、遂に本隊に合せり。和泉が此の武者ぶりは、昔長湫の戦に、本多忠勝が手兵三百を以て豊太閤の數萬の軍と並び行き、遂に家康の軍に合したるに似たりとて、皆人嘆稱したりけり。  
かくて、敵は北上の道を遮られ、只南東にくと壓迫せられしが、かくては目的を達すべき道なしとや思ひけん、俄かに北方に回頭し、死物狂の勢を以て我が後尾に廻り出でんとしければ、我が主戦艦隊も急に

十六點回頭をなし、北西に向つて敵の前頭を壓し、装甲巡洋艦隊は分れて敵の側面に出で、敵を中にして殆ど乙字を畫き、益猛射して再び敵を南方に壓したり。  
勢かくの如くなれば、敵は北方に血路を開かんこと遂に叶はじとや思ひけん、次第に南方に遁るべく見えければ、我が主戦艦隊、装甲巡洋艦隊、諸戦隊こゝかしこに分れて、餘さじ漏さじと、掩撃せり。されば、前に戦列を離れたるオスラビヤ、スワロフ、アレキサンドル三世を始め、戦艦、特務艦等の破壊沈没する者少

鈴木實太郎  
第四驅逐隊司令  
廣瀬順太郎  
第五驅逐隊司令  
海軍中佐

朝鮮江原道の東  
方海中に在り。  
十六箇の島より  
成る。

なからず。此の間、鈴木、廣瀬の驅逐隊が白晝、壯烈な  
る水雷攻撃を執行せしは特記すべきことなり。  
かゝる間に、夕陽已に黃海に没し、豫て定められたる  
驅逐隊、水雷艇隊、東南北の三面より漸次に敵に迫り  
ければ、我が主戦隊は戦場を新手に譲り、全艦隊も一  
時引揚げて、明朝鬱陵島に集合すべき由を傳令せし  
め、此の日の軍は果てにけり。  
豫て夜戦は水雷攻撃と定めしかども、朝來、烈風激浪  
を揚げ、夜に入りて、波浪未だ收らず、水雷艇の不利甚  
だしかりき。されど、此の千載一遇の戦に一撃を試

みずんば、生きのこりても何かせんと、驅逐隊、艇隊日  
没前より來集し、各、先を争ひて敵に當れり。敵は探  
照砲穴を以て極力防戦し、白虹、紫電、雨の如く海中に  
飛ぶ。夜戦の壯觀譬ふるに物なし。我が襲撃隊争  
でかこれに擬議すべき、一時に突進して敵の周圍に  
蝟集、肉薄し、其の攻撃の猛烈なること殆ど言語に絶  
しければ、敵艦應接に暇なく、而も、其の距離のあまり  
に近かりしたため、備砲俯角の度を過ぎて、照準を取る  
こと能はざりき。此の夜戦に、敵の戦艦、装甲巡洋艦  
等の或は沈没し、或は戦闘力を失ひしもの亦多く、こ

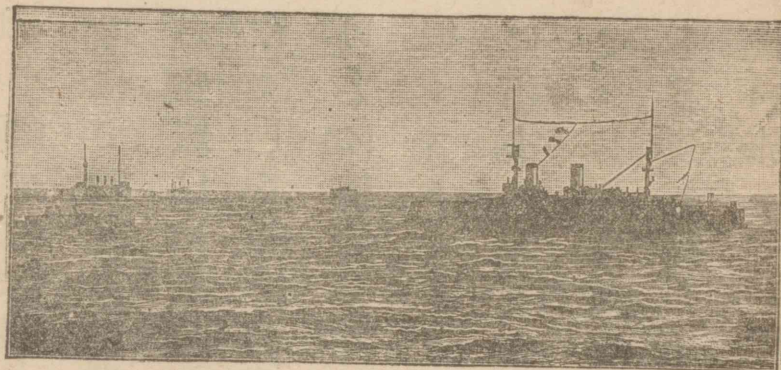
れによりて、敵の陣形全く亂れたり。而して、我も亦水雷艇三隻を失ひぬ。

一四 日本海<sup>の</sup>海戦<sup>その二</sup> 新保 馨次

明くれば二十八日、きのふの濛氣なごりなく霽れて、沖の鷗も見遁すまじく、追撃戦には上もなき好天氣なり。諸戦隊皆豫定の如く、黎明より鬱陵島に向つて航行しありしが、早くも敵影を發見して、主戦隊・裝甲巡洋艦隊・東郷・瓜生の諸戦隊は隱岐の西北なる竹島一名干山島。鬱陵島中の最大島なり。の南方にて、此の敵を包圍せり。是なんネボカド

フ少將が、撃殘されたる主力を率ゐて北方に奔る一隊にて、戦艦・海防艦・巡洋艦合せて五隻なりしが、敗餘の殘艦已に抵抗の力なく、我が艦の砲火を開くや、忽ちにして白旗を立て、降意を表しければ、特に將校以上に帶劍を許して、其の降を受けたり。獨り巡洋艦イヅムルードは其の快速力を利用して遂に北方に逃去りぬ。

こゝに、驅逐艦・漣・陽炎は鬱陵島附近にて敵の驅逐艦を發見し、極力追撃して、午後五時砲火を開きしに、敵は白旗を掲げて降を乞ひ、艦内に將官の在ることを



敵艦降服の圖

信號せり。事の様不審なれば、我が士官は日本刀を帶し、兵は小銃を携へて臨檢せしに、豈料らんや敵の司令長官ロジエストウエンスキー中將及び幕僚等こゝに忍び居たり。中將は重傷を負ひたれば、その懇請を入れて、只數人の將校のみを我が艦に收容し、綱を以て降艦を曳きて佐世保に入りぬ。昨日

までは大國の司令長官として海洋に横暴の限りを盡し、が今日は捕虜となりて敵國の士官に連れられ行く。あはれといふも愚なり。かくの如くして、敵艦三十八隻の中、八隻の戦艦は、其の六隻を撃沈し、其の二を捕獲し、その他、装甲巡洋艦以下も、或は撃沈し、或は捕獲し、或は抑留し、若しくは武装を解除せしめたり。敵艦の逃れ得たる者僅かに二隻のみ。捕虜は司令長官以下無慮六千と註す。而して、我が失ひし所は水雷艇三隻、死傷六百餘人にして、其の他、艦艇に多少の損害を受けたれども、今後

の支障あることなし。

捷書宸聰に達す。五月三十日聯合艦隊に勅語を賜ふ。其の中に宣へることあり。

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌ブ

東郷大將奉答の語に亦曰へり。

此ノ海戰豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ一ニ陛下御稜威ノ普及及ビ歴代神靈ノ加護ニ依ルモノニシテ固ヨリ人爲ノ能クスベキ所ニアラズ實にかくの如き大勝は有史以來の海戰に未だ曾て

その比を見ざるなり。

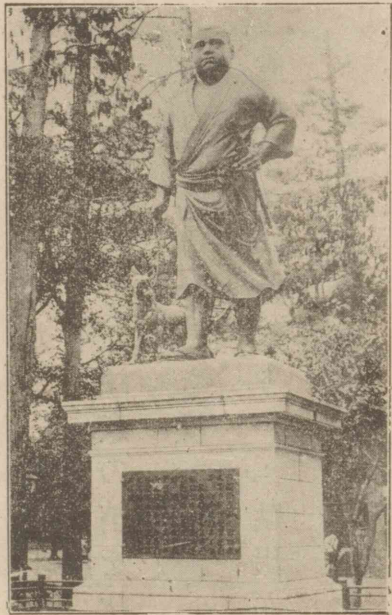
◎ 西郷の象

坪井 正五郎

西郷の象

或夫人が上野公園で、南洲の犬を牽いて立つて居る銅像を指さして、あれ御覽。あれが西郷さんの像ですよ。

東京帝國大學  
理學部教授、  
人類學科  
博士、  
著書は、  
大正二年  
露都に於て  
歿す。



西郷陸盛銅像

といふと、子供は不審な顔をして、象ぢやない、犬だ。

按摩の笛

按摩が笛を吹いて歩くのを目撃した西洋人、  
日本では、盲人が一人で歩く時には、他人に突當ること  
を防ぐために、注意の笛を吹く。

懷中物なき様

或電車の中にかういふ貼出が有つた。

御懷中物並びに御忘物無之様御注意下されたく候。

これでは切符が買へまい。(半のよだれ)

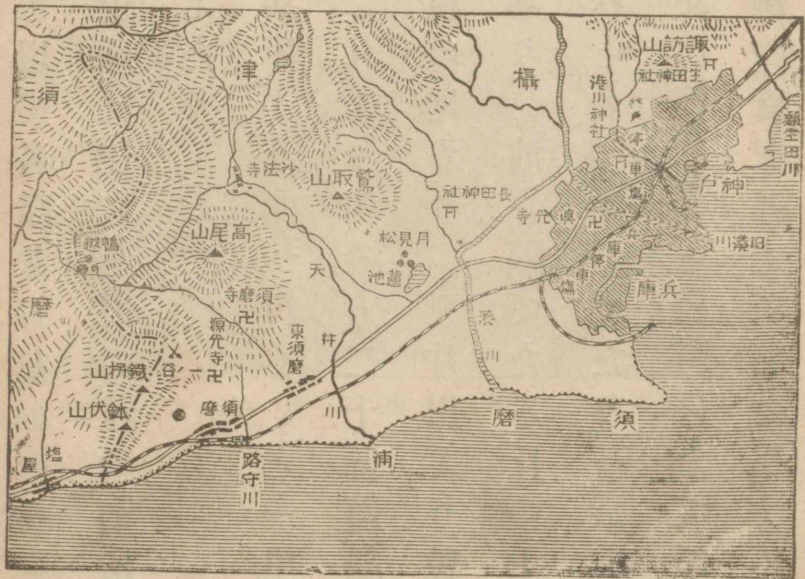
\*須津國武庫郡須磨村

一五 須磨

新保 磐次

攝津の海岸西に盡くる所を須磨の浦といふ。畿内

\*平安朝初期の人



近 附 磨 須

の咽喉にして古の須磨の關の地なり。相傳ふ、在原行平卿、勅勸を蒙りてこの土に住せりと。其の後、壽永の亂に、源平二氏大にこゝに戦へり。されば、須磨は僻地なるにも拘らず、關の址を以て名高く、貴人の舊跡

を以て名高し。しかのみならず、風光清絶にして、月色殊に佳きを以て、月の名所として古より天下に聞えたり。

兵庫より西へ行くこと一里餘にして天井川あり。これより西の方二十餘町、攝播の界に至る迄は須磨村の地なり。天井川より數町にして路傍に用水池あり。池を隔てたる丘の上の老松は行平の月見の松と名づけられたり。

更に行くこと數町にして須磨寺あり。こゝに平敦盛の首塚と云ふがあり。又、敦盛の遺物と稱する寶

源氏物語の主人  
松尾桃青といふ  
徳川時代に於ける  
俳諧の大家

物數多を藏して參詣の人に觀す。須磨寺の隣なる



須磨寺

源光寺は俗に光源氏の舊跡と云へり。こゝに芭蕉の句を忍りつけたる碑あり。

見渡せば、眺むれば、見れば、須磨の秋。

源光寺を過ぐれば、こゝは古の關屋の址にして、石の榜示あり。前の小流を路守川といふ。此の邊源平の戦に關せる古跡と唱ふるもの頗る多し。

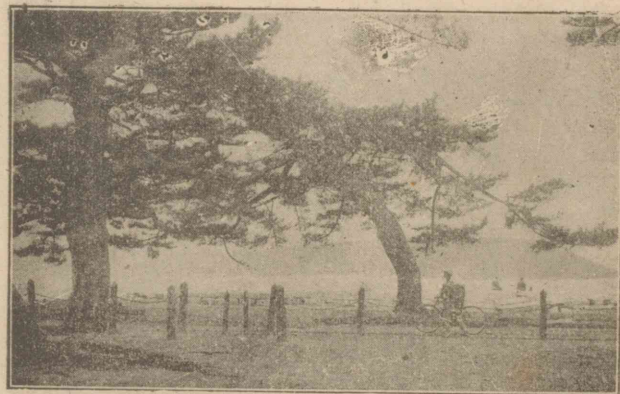


又、西すれば、山陽本線の須磨停車場あり。是を過ぎて數町にして一の谷を渡る。

昔、平氏が第一の要害と頼みけんも、今は沙崩れ谷淺せて、僅かに一條の溝を残し、こゝに數尺の石橋を架せり。

一の谷より國界にいたるまで十餘町の間は、鐵拐鉢伏兩山の麓にして、山頂より路傍に到る

まで一面の松林なり。是即ち須磨御料地なり。



舞子より淡路島を望む

この處より眺むれば、前は蒼海渺茫として、遙かに紀泉の山を繞らし、左は天井川の沙洲斗出して、粉壁樹林の中に點じ、右は淡路島の漁家呼べば應へんとす。顧みて、鐵拐鉢伏を望めば、御料林の老松、山上に連なり、龍蟠り、虎踞る。四面の絶景、恰もパノラマを見るが如し。況や明月中天に懸り、海波銀を磨する時に於てをや。須磨の須磨たる所は實に此の十餘町の間にありといふべし。

須磨は風景の佳なるのみならず、醫家の説に據れば、空氣清潔、氣候溫和にして、人の養生に宜しきこと亦

海内に冠たりといふ。近來衛生の學漸く進み、土地の効力を信ずることも漸く深くなりたるに隨ひて、須磨に轉地保養するもの日に多きを加ふ。こゝを以て、旅店、別莊、青松、白砂の間に相望み、凡そ地の買ふべく、借るべきもの殆ど餘す所なく、十年前の漁村變じて雜沓の街とならんとせり。獨り一帯の御料林は、固より金力の侵すべきに非ず、民之を得ざるが如くにして、永くこれを失ふことなし。富人も往き、貧生も遊ぶ。風景依稀として古の須磨なるは、亦吾が帝室の餘光にあらずや。

一六 須磨明石

松風清き夕波に

月もよせ來る須磨の浦。

關屋は跡ものこらねど、

人の心やとまるらん。

二

波間にしづく秋の夜の

月の光のあかし瀉。

昔はそこの白珠を

あまの男、狭磯<sup>ひらいそ</sup>やかづきけん。

(小學唱歌)

播磨國赤穂郡にあり。

一七 大石良雄と忠僕八介 藤岡作太郎  
元祿十五年十二月十五日、冴えたる月影も薄らぎ、昨日降りし雪の上より、夜は明けぬ。朝風寒き永代橋を、同勢あまた、火事装束に身を固めて、足並勇ましく西へ渡るは、これぞ赤穂の浪士四十餘人が、今しも本望を遂げて高輪の泉岳寺に引上ぐるなりける。見驚き、聞き驚きて、噂は忽ち江戸中に弘り、諸國に弘りぬ。何處の里も、その評判のみ喧しく、浪士の平生の事、その一族従僕の事までも多く世に傳はれり。

徳川中葉の兵學家、會津の人

徳川中葉の儒者、京都の人

四十餘人を指揮せる大石良雄は、通稱を内藏介といふ。もと、千五百石の祿を食みて、淺野家の國家老なりき。小兵にして、聲低く、詞すくなく、立居振舞も靜なり。寛文の頃山鹿素行罪を幕府に獲て、赤穂に預けらる。素行、經學と兵法とを以て天下に名あり。一日、赤穂侯に對ひていはく、「日頃の厚遇、謝し奉るに辭なし。聊か御恩に報いんが爲に、心腹を傾けて諸士を教へたり。蒔きたる種は生ゆる時も候ふべし」と。良雄もこれに學び、又京に出でては伊藤仁齋の門に入れり。仁齋評して、「この人、愚なるが如くなれ

ども庸器にあらず。必ず大事に堪へん」といへり。赤穂の封奪はれし時、諸士狼狽してせんすべを知らず。良雄、日頃は重用せられず、才ありとも見えざりしが、この時に至りて、少しも周章てたる色なく、事務を處理すること流るゝが如し。諸士始めてその器量に心服して、進退を一任し、その指揮に従ひて働くこと手足の如くなりき。赤穂の城を明渡して後は、諸士思ひくゞに離散せり。良雄も亦國を去つて、洛東なる山科＊に移らんとす。嘗て召使ひし老僕八介といふもの、暇乞にとて來り、

＊山城國宇治郡にあり。

「わが君今出で立ちたまはゞ、御目にかゝるもこれや限なるべき。われ、かく老朽ちて、御供に立つことのかなはぬこそ残念なれ。せめては、形見の一品にても賜はりたし」といふ。良雄、頭を撫て、「今度の騒動にて、われも途方にくれぬ。重ねての仕官も面倒なれば、都近き田舎の百姓となりて、やすらかに一生を送らんと思ふなり。長々實義に奉公しくれたる禮に、何なりとも與へんと思へども、今の身の上なれば心に任せず。せめては、これだけにも收めくれよ」として、十何兩かの金を取出して、與へたり。

八介その包を取つて投げ、けがらはし。老いぼれたれども、八介金がほしさに參るべきか。日頃の丈夫の御心も腐り候ふか、亂れ候ふか。金が大事ならば君こそ御貯あれ。思へば、代々高恩の御城主は恨を吞んで御最期あり。赤穂一面野も山も空しく人手に渡るを見ては、われら如き下臈すら、胸も涌きかへるに、三百人の侍揃ひも揃うて、腰拔侍にて候ことの悔しさよ。いつの爲とて御城主は侍を養ひ給ひしぞ。赤穂の武士に一人も魂あるものなきか。くち惜しや」と罵りて、涙をはらくと流せり。

良雄は俯きて、物をも言はず。やゝ久しうして、われ過てり。汝の諫言、永く忘るまじきぞ」とて、やがて筆を執つて、主従二人の姿を畫き、「これを見よ、八介。これは、わが若かりし頃、江戸にて、汝を供につれて歩きし様を寫せるなり。昔を思ひ出し、これを形見に取らす」とて與ふれば、八介も、やうく憤を收め、御筆の迹こそ賤が伏家の寶なれ。いくばくもなき世に、朝夕君と仰ぎてかしづき奉るべし」と、おし戴きて歸れりとぞ。その後、元祿十五年の冬まで、八介はながらへて、復讐の噂を傳へ聞きしか、いかに。

(一) 名は君美、徳川幕府の儒官、六代將軍家宣に仕

(二) 徳川三代將軍家光、後左大臣と代なる。幼名竹千

(三) 忠 徳川二代將軍秀

一八 松平信綱の幼時 新井白石

伊豆守源信綱は、大河内金兵衛入道休心が孫、金兵衛久綱が嫡男にて、伯父正綱に養はる。慶長九年七月、左大臣家御誕生ありし時、信綱わづか九歳にて若君の御家人になさる。童名長四郎と申す。或時、若君、大殿の御寢殿の屋の軒端に、雀の巢をくひ、子を生みたりしを、こなたより御覽じて、欲しがらせたまひ、「長四郎、とりて參らせよ」とあり。長四郎年十一歳のときなれば、いかにも叶ふまじきよし辭しけ

れば、晝は驚きて飛去ることもありなん。巢くへる所をよく見置きて、日暮れてこなたの屋の軒の端さして登り、彼處に忍び行きて取るべし。大人は身重く足音もしなん。只汝取りて參らせよ」と侍ふ人々の教へしかば、力なく日暮れて、こなたの屋よりして傳ひく行く。既に御寢殿の軒に至りて取らんとせしに、踏損じて御坪の内へどりと落つ。將軍家御刀取つて障子引明けたまへば、御臺所燈火とつて出でさせたまひ、御覽ずるに長四郎にてありけり。將軍家不思議に思召して、「汝は何しにこゝに

は來りぬるぞ。」と御尋ねありしに、「今日の晝この御殿の屋の軒端に雀の子を生みたるを遙かに見て、餘り欲しさに参りて候。」と申す。將軍家「いや、おのれが心にはあらじ。誰か教へけるぞ。」と色々に御推問あれども、幾度にもはじめ申し、言葉に變らず。「おのれ、事の由ありの儘に申さず、争ひぬること年比にも似ぬ不敵なれ。」と仰せられて、大きな袋の中におしいれて、口を御手づから封じ給ひ、柱にかけさせ給ひ、「事の由ありのまゝに申さざらん程は、いつ迄もかくて候へ。」と仰せけれども、尙争ひ申す事初の如し。

夜已に明けて、常の御座に出でさせ給ふ。御臺所は夙く心得させ給ひて、彼が幼き心にて、身の悲しさをかへり見ず、「竹千代君の仰せなり。」と申さざること深く感じたまひて、女房達に仰せて、朝がれひ召して「是たうべよ。」とて賜はりて、又御手づから元の如くに縫はせ給ひて、置かせ給ふ。晝の程將軍家入らせたまひ、又推問ありしかど、終に言葉を變へず。御臺所御訖言ありしかば、さらば向後の事を慎むべきよし仰せて、御宥しあり。將軍家御臺所に向はせたまひ、「彼が今の心にておひたちたらんには、竹千代殿の爲

には雙なき忠臣にて侍らんものぞ」と、殊の外悦ばせ  
たまひしとなり。(藩翰譜)

一九 花すみれ

堇

大隈言道(藩翰譜)

歸り來てねたる童の袂より

こぼれ出でたる花すみれかな。

雲雀

三條西季知(藩翰譜)

芝生には何時おち來らん、夕雲雀、

なほ空たかく聲の聞ゆる。

花

小池道子

主人にはいとまごひして、更にまた

垣根のはなをかへりみるかな。

納涼

千種有任(藩翰譜)

夕月の涼しきかげも見えそめぬ、

すだれかゝげていざ端居せん。

見月思都

税所敦子

照る月に向ふ心のかはらずば、

都の友も我をまつらん。

○



元日

蜀山人

生酔の禮者を見れば、大道を

よこすぢかひに春は來にけり。

時鳥

つぶり光

ほととぎす自由自在にきく里は、

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里。

夕立

暗 安

からかさの骨折り損に出迎ひの

かついでかへる夕立のあと。

樹陰納涼

敞 龜 坊

戴いて暑さ凌ぎし笠さへも

尻にしいたる森の下蔭。

富士山

鯛屋貞柳

富士の山、夢に見るこそ果報なれ。

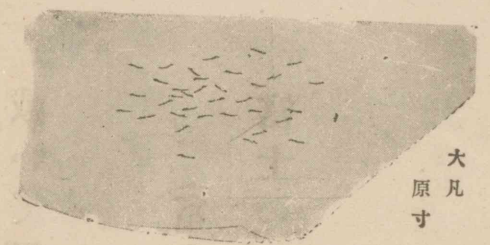
路銀もいらす、くたびれもせず。

二〇 養蠶

絹布は美しくして光あり、輕軟にして體にかなふ。

下ぎまのものも、晴にはこれを着、高ききはの人々は、  
平常着にもこれを用ふ。其の餘、室内の裝飾、書畫、珍

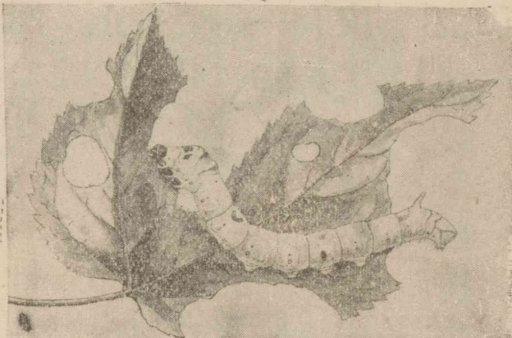
玩什寶の類も、絹布若しくは絹絲を用ひて美を添へざるは少し。内國に於て多くの用を充すのみならず、海外に輸出すること年毎に絹布三四千萬圓、絹絲一億數千萬圓の多額に上り、我が國輸出品の第一位を占む。そも、この貴重なる物品は如何にして生ずるぞ。蠶といへる昆蟲の生成物に外ならざるなり。春去り夏來らんとして、桑葉僅かに萌えいづる頃、蠶は蠶卵紙なる卵より孵化す。柔かなる羽箒もて掃落して籠



大凡原寸

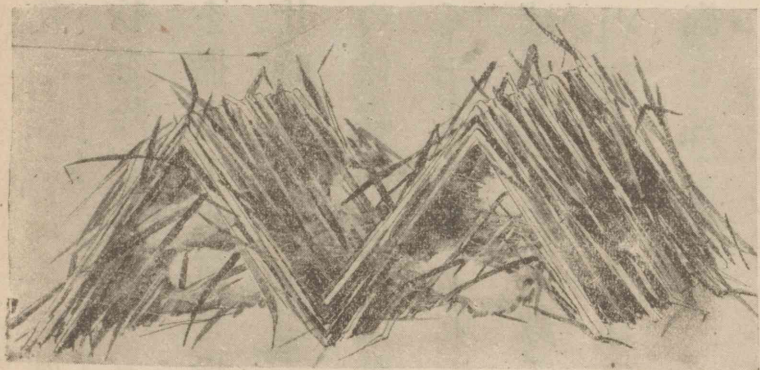
に入れ、桑葉を摘來りて截りて與ふること日々に數回なり。五日乃至十日にして、蠶は桑を食むことを止め、眠るが如く休息して、やがて全身の皮膚を脱す。これを第一眠と稱す。掃立よりこゝに至る間を第一齡といふ。眠後、食を取ること數日にしてまた脱皮す。これを第二眠といふ。第一眠以後こゝに至る間を第二齡と云ふ。更に第三、第四の眠を経て第五齡となる。初生の時に殆ど見るべからざりし黒き毛蟲は、今や成長して長さ大約二寸の青白き幼蟲となり、食を取ること最も盛なり。人若し蠶室の中

を上簇といふ。



原寸の大凡三分の二

に立ちて、數千頭の蠶兒が一齊に桑を食むを聞かば、驟雨の俄かに到りて屋を撲つが如きを覺えん。葉の縁邊より噛みはじめて漸く中央に及ぶ。げに蠶食といふ語はこれよりぞ出でたる。さる程に、蠶は食を絶ち、身は次第に透明となり、左顧右眈して頻りに繭を造るべき處を求む。こゝに於て、藁或は樹枝を籠に盛りて、蠶を其の中に移す。これ簇ササに上りて、蠶は身を適宜の位置に



原寸の大凡三分の一

置き、口より絲を吐き、右にかけ左に引き、上にかけて、下にわたし、經緯縱横、漸く身を覆ひ、益、四周に絲を吐きて已まず、數日にして繭全く成り、蠶はその中に在りて蛹と化す。掃立よりこゝに至るまで凡そ三十餘日なり。こゝに於て、簇を去り繭を收めて、絲を製し眞綿を造り、或は蠶種を獲る料に供す。

凡そ、蠶を養ふや、夙に起き夜に寐ねて、桑葉を摘み、汚物を除くは更なり、或は室を暖め、或はこれを冷し、水を撒きて水氣を増し、火を焚きて空氣を乾かすなど、片時も注意を怠るべからず。しかのみならず、黄梅の候、霖雨連日、桑葉盡くうるほへるときは、火に炙りて一々これを乾かさざるべからず。其の煩勞いかにばかりぞや。數千の蠶兒、頭を並べて一時に病にかかれるときは、其の原因を尋ねて、急速に治療の法を施さざるべからず。其の憂慮いかにばかりぞや。されども、健全にして能く發育したる蠶を簇にのぼせ、

果て、連日の勞を休め、衣帶を解きて安らかに寢に就き、翌朝起きいで、見れば、全簇恰も雪に埋れたるが如くなるときは、其の愉快亦いかにばかりぞや。

春蠶終る頃、夏蠶は孵化し、夏蠶終る頃、秋蠶は孵化す。三期を通じて三四箇月、此の間は養蠶家の飼養に忙しき時なり。其の餘の時は、桑圃を耕耘し、肥料を施し、籠を造り、簇を備ふるなど、飼養の準備をさくく怠ることなし。

養蠶の事は尤も婦女の業務に適す。故に、信濃、上野などの蠶業地にては、老となく少となく、皆此の業に

従事し、猶足らずして、他の地方より婦女を雇ひ入るること幾何なるを知らず。されば、蠶事の巧拙は嫁娶の條件となるに至る。其の他の地にても、現今は蠶を養はざるはなく、婦人のこれに従事するもの漸く多し。あはれ、人々ますますこの業をすゝめて國富を増さんことをつとめてやは。

名は成行、著述家、文學博士。

二 雜草

幸田露伴

雜草といふものこそおそろしきものなれ。之を蹂みにじり、之を荊薙ぎ、之を拔棄て、之を燒拂ひても、終

にほろびうせたる例を聞かず。必ず年々の春夏を我が世顔に生ひしげりて、あはよくば、人の思を寄する園の花をも逐ひのけ、民の命と頼む稻麥をも虐げて、おのれのみ心のまゝに蔓り榮えんとす。されば、園守・田夫少しく之を除き去ることを怠れば、忽ち其の咎を得て、花は色無く、穀はみのらざるに至る。されば、世に若し雜草といふものなからば、能く勤むる者も、惰る者も、一度種子を播き、苗を植ゑたる以上は、皆同じ報を得べきに、これありて勤むるものは佳報を得、惰るものは惡果を得。雜草は人間の怠惰を警

むる造化の鞭にやあらんとおそろし。  
(潮待ち草)

\*名は猪一郎、國  
民新聞社長、貴  
族院議員。

二二 農業の快樂 徳富蘇峰

農業は人をして健全ならしむ。すべての人は、樹木と同じく、大氣中に生活せざるべからず。農業の生活は概して戸外的なるを以て、最もこの目的に適へるものなり。  
農業は人をして著實ならしむ。いかに性急なればとて、播きたる種の直に實らんことを望むものはあらじ。また、いかに奇法ありとも、播かぬ種の生ずべ

き理は無からん。所謂人事を盡して、天命を待つ。といふ妙理は、手を農業に染めて、はじめて、よくこれを領會するを得べきなり。

農業は人をして科學的知識を養はしむ。農業は常に天然と接するものなり。されば、播種、培養の法、その發達、その變遷、その妙機は、仔細にこれを觀察することを得べく、また、その間におのづから因果の法則の整然として動かすべからざるものあることを會得し得べきなり。  
農業は人をして美趣を解し、詩情を養はしむ。支那

晉の詩人、名は

の陶淵明は嘗てその詩情を田園に養ひ、その詩材を農桑に取りて、千古の大詩人となることを得たりしにあらずや。その他詩趣を無名の野花・幽草の上に討ねて、自然の美を歌ひ出で、大詩人たる名譽を荷ひ得たるもの、東西古今、その例に乏しからざるなり。農を本業となす、もとより可なり。他の職業に従事するものの、これを餘業となす、亦頗る可なり。掌大の庭園も、數株の花木を培養するには、あまりあり。況や、かの地方に別墅を有する人においてをや。かはかり容易なる事はなかるべく、また、愉快なる事も

なかるべし。これを、かの鳥獸を殺戮して一時の快を貪る銃獵の如きものに比すれば、その趣、その樂、豈に番に膏壤の差のみならんや。

二三 わが故郷

徳富健次郎

わが故郷は九州のほゞ真中で、海に遠い地方、幅一里長さ三里といふ、もつさりの底見たやうな谷である。どちらを向いても、雜木山がぐるりと屏風を立てまはし、その上から春は青くなり、冬は白くなる遠山がちよいく顔を出して居る。最も高いのは東に一

\*著述家、庶花と號せり。

つ孤立して居る高鞍山で、だれが天邊に乗捨てたのか、さながら鞍を置いたやう。雨が降る前には、必ずこの山に雲がかゝる。この山が見えだすと、どんなに降つて居ても、やがて霽れる。雲がかゝるのも、日が射すのも、まづ此の山が第一で、いはゞ、わが故郷の氣象臺だ。四方の山から混々と涌出る清水は集つて、村人のいはゆる大川、小川の二流となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田。その田を無理におしのけて、こゝに村が一撮み、かしこに家が二三十。北の隅にあるのが、まづこの谷の

都て、町といへば町だが、戸數は千にも足らない。取出して、いふ程でも無いが、今に忘れ難いのは、水の清さと稲の美しさである。たしか東京に積出して、鯔米にするさうな。その稲葉のつや／＼と青んで、のび／＼と立揃つた所は、都人士に見せたい。殊に見せたいのは、蛙の聲を踏分けて、一村總出の田植時、さをとめの白手拭がひらり／＼と風に靡いて、畦から畦に田植歌の流れる頃の賑やかさである。それから、炎天の田の草取は、わきで見てもつらいが、しかし、夕方暑い、堪らぬ。といふ下から、ごろ／＼鳴り



出す。俄かに大氣が冷える。見ると、黒雲がもう高鞍山を七分どほり呑んで居る。それがインキの散るやりに、ずうと満天に浸みひろがつて来る。稻妻がぴかり。夥しい雷鳴が二つ三つ。つめたい風がさつと吹いて来ると、やがて、大粒の雨がぼつり。耳を掩うた太郎作がまだ半町と逃げ延びぬ中に、光る、鳴る、降る、吹く、世の終りかと思ふ程の荒れやう。と思へば、忽ちすうと明るくなる。笠おつ取つて、出て見る頃は、夕立は最早隣村へ逃げのびて、隣村はさながら簾越しになつて居る。大空を眞二つに割つて、

東の方はまだ眞暗、雷様がごろ／＼太鼓を敲いて居るが、西の方はあか／＼と夕日がさして、高鞍山のでつぺんと思ふあたりから谷へかけて、すばらしい虹が立つて居る。あゝ、涼しい。見よ、先程まで萎えしをれて居つた稻が、たつた一瞬の間に、眼も覺める程青々となつて、一二寸も伸びたやりに、どこを見ても、さわ／＼とさわめいては露を揺りこぼして居る。濁り泡だつ田の水はどく／＼溢れて、小鮒や鱈がやたらに畔路にはねて居る。蟲送も濟んで、初秋の風がそよ／＼と稻葉に音づれ

る頃は、夜は露より明けて、朝日に匂ふ稻花の美しさ。二百十日・二百二十日の厄日も事なく過ぎて、青疊敷いた谷間がいつしか金色に照つて、こゝにもさわさわ、そこにもさく／＼、收穫のさかりになれば、だれを訪ねても家には居ない、皆田に出て居る。時雨が降出すと、夜晩くまで靱ずりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稻が最早奇麗な米俵になつて、庫や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓うつて豊年を祝ふのである。夫から、水。あゝ、こんな水が縦横に市中を流れて居

たら、東京もどんなによからう。わが故郷では殆ど井戸の用なしといつてよい位。四方の山から絶えず涌出る清水は縦横に小さな流をなして、鮎走る二つの川に落合ふ。どこに行つても、潺々、淙々の音が聞える。夏の月夜などに、じつと聞いて居ると、實に好い。京都は水がよいといふが、自分は京都よりもよいと思ふ。馬が飲む道傍の小溝の水も、女が洗濯をする家の前の流も、乃至水車が攪混ぜる田川の水も、實に水とつめたく、玉と澄んで居る。今でも、夏になると、自分は一入故郷をしのぶのである。(思出の記)

\*  
名は金太郎、文  
章家

二四 飛驒の山中より留守宅へ 遅塚麗水

毒蛇の群の行旅の人を悩ますといふ龍が峰を突貫して、今日は炎天の下に十四里を歩き、唯今飛驒の都の高山を距ること三里、三日町の寒驛まで辛くも到着、旅館に投じ申し候。

をかしかりしは、昨夜の畑佐の宿にて鍍金の飯を饗せられたる事にて候。そは宿の媪、東京のお客様にとて、多大の好意にて、米の飯を炊きくれたるが、例の麥一分、稗一分、粟一分の三分飯と申すを椀に盛り、其

の上に薄く米の飯を盛り添へたるものにて候。箸をつけ候へば、鍍金忽ち剝落、飯と共に一驚を喫し申し候。此の邊にては、瀕死の病人ならでは米の飯を食はしめざる由に候。菜は丸烏賊の鹽漬と臭き味噌汁、干瓢と豆腐の煮ノ。鮎などあるべし、持來るべしと命じ候に、主人畏るゝ入來りて、鮎はござりませが、お高うござりますと斷る。高くともよし、鹽焼にして持來れと命ずれば、やがて、大きき八九寸のもの數尾を膳に上せ來り申し候。山中の盛饌之に過ぎたるもの無之候。而も、甚だ廉、僅かに十二錢、一尾

二三錢ばかりにて御座候ひき。

唯今隣房に宿りたる巡查の話によれば、此の邊は赤痢の大流行地との事に候。今日、途上渴に任せて溪水を掬ひ飲みしことを思へば、寒心に堪へず。明曉は早く高山に到着し、豫て見んと思ひしものを見物して、急ぎ神通川に沿ひ、一刻も早く飛驒を立去り、越中富山に出づる考に御座候。

出立の前日、上野へ詔へし乳母車は、や出来いたし候事と存じ候。子供を載せて毎朝公園へ御散歩、然るべくと存じ候。子供の寢冷、火の元、共に御用心。草

々。(現代名家書簡集)

二五 大淀川の夜明 徳富健次郎

大正二年九月二十一日

今日は宮崎を立つ日である。そつと蚊帳を出て、二階の縁から眺める。

天明である。空も川面もまだ残んの夜を被いでうつとりとして居るが、東に當る川下の空はもうぼうつと明るんで居る。見て居る間に、其の明るみが一搖揺れては力強くなつて行く。一分づゝ天地の臉を見開く様。秒一秒明るくなつて来る。加速度を

以て明けて来る。明るくなつた。もう日の出に間は無いと思つて居る内、どんよりして居た大淀川が川下の方から、ずらずつと明けて來た。光の潮が溯つて、迸つて、湧きあがつて来る。何の事は無い、全く川が逆に流れ出して來たのだ。夜の衣の逆剝ぎだ。何といふ夥しい生命の力であらう。もう日の出だ。見る／＼東の朱金の光耀の底から、瑞々しい靈光、活潑々地の白い焰の球が、ゆらくと水平線上に跳り出た。と、大淀川の川面に白金の龍が、つ、つ、つとのたをうつ。

日が出た。日が出た。日に向ふ日向の國に今日の日が出た。あゝ、日向——古い、古い、歴史の國。新しい、新しい、生命の日の出。着いた夜の寂しさ。立つ朝の勇ましさ。昨日から持ちあぐんでゐた宿のアルバムに欣然と樂書する。

大淀の川逆流る心地して

日今昇る東海の天。  
(死の蔭に)

二六 青島

大正六年\*

(一)

七月二十一日、未明に起出でて甲板に立つて見ると、

見渡す限り一面の深い濃霧が海原を罩めてゐる。波のうねりが小さくなつて、その色は少しく濁を帯びてゐる。餘程陸地近くなつたのだ。膠州灣の山影がもう望めるだらうと思ふ時分



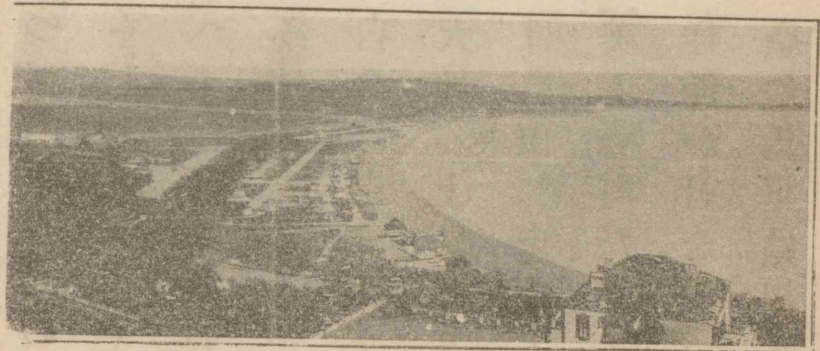
に、船體はピタリと動搖を止めて、やがて錨を下して了つた。船員に訊ねると、霧が深いために陸地に接近することが危険で、とても進むことが出来ないのださうな。やつとの思ひでこゝまで漕ぎつけて、眼と鼻の間の陸地に上ることが出来ないとは、何といふ情ないことだ。取付く島を失つたとは正にこの事だらうと考へた。否、實は、そんな洒落どころではなかつた。絶えず警笛を鳴しつゝ、濃霧の中を彷徨すること七時間、漸く霧の晴間を見て、船は徐々に海岸へ近づいた。

深く垂罩めてゐた海上の濃霧が次第に霽れてゆく。さうして、夢のやうな前景の中に、青島の風光が朧な姿を現して來た。

赤い屋根、白堊の壁、それが緑の丘を背景にして、高く、低く、海添ひに並んでゐる。午後の光線を逆に受けた帆船が黒く光りながらエメラルドの海を傾きつゝ走つて行く。その上を鷗の群が亂れて飛ぶ。海上から眺めた青島は美しい港である。南歐の瀟洒たる別荘地とでもいふやうな趣のある港だ。

埠頭に着いて、先づ眼を驚したのは、黒山のやうに集

つてゐる苦力の群である。あのきたならしい様子をして、チロ／＼人を見廻してゐる光景は、何とも言へず薄氣味悪い。馬車に乗つて荷物を受取るはずみに苦力の手が自分の手にちよつと觸れた時には、自分は思はずツとした。併し、兎に角、自分の足は大地の上に確りとくつついてゐる。もうこれからは自由に東亞大陸の土を濶歩することが出来る。美しい町だ。アカシヤやプラタヌの葉隠に、簡素な洋館が軒を並べて櫛比してゐる。一行を乗せた五臺の馬車は坦々たる舗道の上を滑つて、やがて、市民



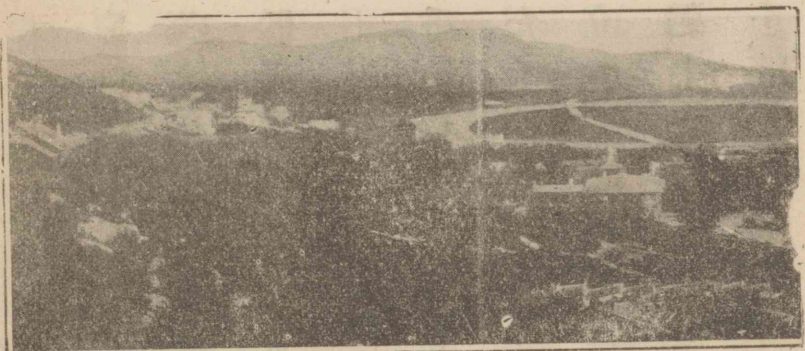
灣アリトクイヴトスグウア

場兵線スチルイ

俱樂部の門前に留つた。今夜はこゝに泊る。青島には三日滞在の豫定だ。

(二)

青島に到着したのは、もう夕暮近い時刻だったので、霧の降つてゐる宵の街を一人であちらこちらとぶらつき廻つた。何とも言へず嬉しい氣持であつた。日本もこんな好い別荘を有つてゐるか



營兵スチルイ

山スチルイ

と思へば、全く愉快であつた。

青島の家屋は一つとして同一形の建築はないさうである。だから、いろいろな形状をした建物が丘の上や下に散在してゐる光景は何ともいへず快い趣がある。緑葉の植込を透してバルコンの向ふの窓から、さゝやかな灯の光が洩れて来る。そこから微かなピアノの音が聽えて來るといふ



有様だ。

翌日は、附近の砲臺を見て廻つた。砲彈のために處處壞れたり、自爆したりしてゐるので、もう完全な形體は具へてゐない。鐵條網なども、貧弱なものが、少しばかり堡壘の麓に残つてゐるばかりである。戦争から既に三年を経過した今日、戦塵の匂は既に甚だしく薄らいでゐる。併し、イルチス砲臺の山巔に立つて、遠く劍戟の跡を忍びながら、遙かに四周を見廻した時には、消えて痕なくなつた敵國雄圖の片影を、流石に、悲しまない譯にはゆかなかつた。

青島には俘虜の遺族がまだ大分残つてゐる。前の民政長官が監禁されてゐるばかりで、その他の者は何等の束縛も受けずにゐる。彼等の多くは婦人と小兒とであるが、何等悪びれるところもなく、平氣で市中を歩いて居る。平氣で歩き廻つてゐるとはいへ、彼等の内心は甚だ頼りないことであらう。歐洲の戦雲が何時の日にも斂るか計り知り難い今日、無道の慘劇を起したる者の憐れな犠牲は、遠く絶東の小天地にまでも、平和の日を待ちつゝ、その姿を潜めてゐるのである。

陸軍大將大谷喜  
久藏

(三)

次の日は、青島市中の官衙などを見て廻つた。ワル  
デック總督の官邸は、今代つて大谷軍司令官の官邸  
になつてゐる。そこは遙かに海を望む小高い丘陵  
の上にある。内地ではちよつと珍しい宏壯な建築  
である。

巖の面に獨逸の國旗たる大鷲の形を彫付けたもの  
が丘腹に陽を受けてキラ／＼と光つてゐる。今は  
その鷲の上に、更に大きい「大正三年十月七日」と雄渾  
な日本文字が彫付けてある。そこから望めば、ちき

眼下に在る軍司令部の藁の上に、大きな日章旗が翩  
翩と風に翻つてゐるのが見える。

青島の郊外へも行つて見た。厚い壁で叩き込んだ  
農家の低い廂が、小徑の邊にあちこちと並んでゐる。  
家の入口の壁の上には「天錢如雨臻」などいふ頗る慾  
張つた文字が紙に書いて貼付けてあつた。畠の隅  
に土饅頭のやうな墓が出来てゐて、その側に小さな  
騾馬が晝寢を貪つてゐた。

赤や青のあくどいまでに濃い色彩で飾つた寺の樓  
門が、町はずれの寂しい草原の中に、折からの斜陽を

受けて、目まぐるしいばかりに強い光を放つて立つてゐる。寺の前の草原には、牛の群をとめて、年老いた支那の農夫が、白髯を佗しげに撫でまはしてゐた。かういふ悠長な畫題を到る處で見受ける。支那には、不生産的な土地と人間とが、過剩にあると思はれた。

青島は涼しいところだ。日中でも七十五度から八十度の邊を上下してゐる。東から海風が絶えず吹いて来る。こんな涼しいところは内地にもあまり多くはあるまい。

(萬朝報所載第一高等學校支那旅行隊の通信に據る)

女流教育家、  
三輪田女學校長

二七

紅蘭女史 その一

三輪田 眞佐子

美濃國安八郡曾根村の人、  
葦木の詩人、勤王家

紅蘭女史は齡十七にして詩人梁川星巖に嫁せり。居ること未だ數句を越えざるに、星巖女史を顧みていふ、吾暫し近國を漫遊せん。その間に之を讀み給へ。とて、三體詩を與へて、飄然として家を出でたり。女史はしばしが程と思ひしに、待てどもく歸り來ず。秋の雁はふたゝび歸り來れども、何の玉章をも齎さず。春の花は三たび咲けども、訪ひくる人の影もなし。されば、離別せよ。など勸むるものもありしかど、女史は拒みて肯はず、日々に機によりて布を織

りつゝ三體詩を誦しけり。

三年を経たる秋、星巖家に歸りて、「かの詩は少しは讀みたりや」と問ふに、女史、一句をも過らで誦しけり。

この後、女史は益書を讀み、詩歌を學びて怠らざりければ、夫と共に四方を歴遊して、名聲大いに揚れり。

女史は才學に秀でたるのみならず、裁縫のわざをはじめとして、家政の道にも精しかりき。書畫は頗る

巧なれども、多くは「鍼線餘事」と刻める印を用ひたり。これ文人墨客を以て自ら居らざるしるしなるべし。

良人は勤王家なりければ、國事に關する書類はいと

多かりけるが、女史は豫め幕府の意を知りて、良人に

數行履信傳年字捧白桐前喜微紅心志布衣等書曲在在實空  
數何詳人乃自有謀忠士て上望子仁中  
令感悃銘信暗解出ふ社對古仰  
家也  
以原十二月十二日  
敷在亡天亞孫甘前愛國之微君以四月十五。臨原地宮室山登希也。持典以在洋而を第々十一年矣  
沈氏書院藏書

謀りて之を烟となしぬ。その後、果して吏來りてその家を検索せしかど、何の證跡をも得ること能はずりき。あはれかゝる婦人こそまことに能く良人を輔佐すとはいふべけれ。

女史嘗て良人より黄金數箇を得て、永く囊中に藏め

善ク歌フ者虞公アリ。聲ヲ發シテ梁上ノ塵ヲ動カス。  
秦青、節ヲ撫シテ悲歌ス。聲、林木ヲ振ハシ、響行雲ヲ遏ム。

て、こよなき寶となしぬ。あはれに優しき情なりけり。女史は、又、琴に熟達し、詩歌に和して弾じけるが、其の妙なること、梁の塵をとばし、空行く雲を遏む。といふ程なりければ、自ら良人を慰め、一家の中さながら春風の薫れるが如くなりき。凡そ、學問に長ぜる女子は濃かなる情に乏しく、和順の徳を缺けるもの多き習なるに、實に女史の如きは類稀なる婦人といふべし。

二八

紅蘭女史 その二

三輪田 眞佐子

\*井伊直弼

安政五年九月二日、梁川星巖翁、尊王の大志を抱きながら、病のために世を去りけり。この時、幕府にては井伊大老事を執り、外國と條約を結び、大に志士を捕へぬ。幕吏はかねて星巖を指したりしかば、やがて其の妻紅蘭を捕へたり。捕吏の來りしとき、女史は少しも騒がず、従容として家人を顧みて、心して留守せよ。といひて、さながら隣家に行くが如く、泰然として出でゆきけり。幕吏女史を糺問して、尊攘論者の事情を探り知らんとつとめしかど、女史は答へていはく、吾が夫は輕々

しく人に機密を洩すが如きものならねば、われは聊かも知れることなし。よし、ありとも、夫の祕密を告ぐるは妻の道にあらじ。とて、何事をも言はざりければ、吏もせんかたなくて止みぬ。

女史は今や獄中の人となれり。獄吏も流石に物のあはれをば知りたりけん、數羽の鳩を飼ひて、その無聊を慰むる事を許しぬ。女史更に紙墨を得ん事を望みけれども、許されず、唯筆と板とを與へられければ、晝は淡水もて板面に書畫を描き、夜は詩を作り、歌を詠じて、思を遣りぬ。かくて、うき月日を獄中に送

ること半年近くに及びしが、高き操は益高く、心は露ばかりも汚れざりけり。明月雲に蔽はるとも、いつかは雲晴れて光照りそふ時なからん。女史、翌年二月十六日に至りて、赦されて再び青天白日の身となれり。

二九 讀 書

坪 内 雄 藏

常に良き著述に親しむものは、獨り居りても、寂しきことを覺えず、師を求めずして、日に月に學ぶ所あり。失意にも慰み、不平憂悶にも之を忘る。「書は少年の

滋味にして、老年の娛樂なり。順境には心の飾となり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。外に出てたる時も、邪魔とはならず、家に在れば、心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴と、羅馬の名士シセロキケロの言ひしも同じ心なり。されど、かくの如きは未だ讀書より受くる最大の利益とは謂ふべからず。

諺に、「百聞一見に如かず」といへるは、何事もその身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命限あれば、七十八まで生きてりとも、目に視耳に聽くことは、幾何もあるべからず。わが日本國內の山

シセロ  
羅馬の政治家

水・風俗のみにてても、一生には觀察し盡さるまじく、天地の大いなるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗の狭く、淺く、小さく、かつ、少なかるべきは、言ふにも及ばぬことなり。さればこそ、今も昔も、苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を觀んと欲する人々は、一方には、見聞を廣め、經驗を積むと共に、他方には、遍く内外古今の名著を得て、これに親しまんことを願ふなれ。いはゆる名著は、人間世界開けてよりこのかた、およそ三千年間に出でたる大賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像をそのまゝに、又

は、ランビキにかけて集め蓄へたるものなり。或は、之を顯微鏡望遠鏡に譬ふるも可なり。人をして肉眼にて看得ざる微なるもの、又は、遠く且幽かなるものをもよく看取することを得しむ。後れて生れたる者にして、良書の助を借ることなく、只その貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も、人間界の事も、僅かに一斑を窺ふに過ぎざるべく、その一斑すらも正しく明には看得ざるべし。要するに、書は知識の寶庫にして、かねて、智を研く砥石なり。しかしながら、讀書の用は尙これに盡きたるにあらず。

(1)

1964-2034

伊太利の詩人ペトラルカ書について曰く、予に良友あり。彼等は皆名士大家にして、いづれも偉業を成したる者なり。予若しその助を藉らんとすれば、彼等は喜んでわが請を容る」と。これ、良書が常にその讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングも曰く、吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、主として書籍の媒介に因る。而して、かゝる價知らぬ交際の手段は衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては俊傑吾人に對ひて語り、その最も貴き思想を吾人に

(2)

2140-2502



\*2268—2334

與へ、且、その心靈を吾人の爲に吐露す」と。英國の詩人ミルトンも、また、曰く、「良書は保存して後世に備へられたる、俊傑の貴重なる生血なり。」と。

人は良書に親しみて、まづわが卑小なるを知る。次には、或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ、同じ人にして、高く、清く、美しく、偉なること、かくの如きものもあるか」と歎ずるに至る。而して、若し、その偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、則ち書の用極れるにちかしとい

ふべし。(中學修身訓)

三〇 友の不攝生を諫む

昨晚一寸御尋致しました處、生憎御留守で、残り惜しうございました。實は、其の節叔母様より承りましたのですが、あなたは近頃兎角御勝れなさらず、御食欲も頓と御減じなされ、御息遣ひも苦しげに御出て遊ばすとのこと、それにも拘らず學問には益、御出精で、一寸の間も御机を御離れなく、折々は徹夜なども遊ばすとの事。叔

母様が「少しは學課を休んでも、まづ身體を丈夫にする様に。」と切に御勸告遊ばしても「自分の辿る道の爲に斃れるのは却て本望」などと仰せられて、一向御聽入なく、益、深入をなさる御様子とか。もし是が事實でございませうなら、夫はあなたにも御似合なさらぬ御心得違かと存じます。よく下世話にも「命あつての物種」と申すではございませんか。いかにおせきあそばしたとて、學界は限りもなく廣いのに、身體が弱くては、思ふ事がどれ程成しとげられませう。申さば、動

力も起さないうて機械を運轉させようとするやうなものかと存じます。のみならず、之が爲にもしも取りかへしのつかぬやうな事にでもおなり遊ばしたら、よし貴女は御本望と思召さうとも、御兩親様の御心中はいかばかりでございませう。「父母は只其の疾を憂ふ」と、いつかも修身の時間に承つたではございませんか。「身體髮膚之を父母に受く。敢て毀傷せざるは孝の始なり」とか、孝經といふ本には書いてあると申します。已に生を此の世に受けた以上、父母の

恩の廣大な事は申すまでもございますまい。然るを、もし萬一の事でもあつたら、其の廣大な親の御恩を、あなたはどうしておかへし遊ばすおつもりでいらつしやいますか。又、其の御嘆を、いかにしておとめなさるおつもりでいらつしやいますか。人の子として、これほど親不孝な事はなからうと存じます。彼の有名な曾子といふ方は、病んでまさに死なんとした時、弟子達に自分の手と足とを啓かせて、其の傷なきを見て、さて、今にして始めて不孝

の罪を免れた事を知る。といはれたとか。孝子の心掛くべき事が是によつて明らかに窺はれるではございませんか。然るに、あなたのなされ方は、不思議にも之と正反對の方に向つて御出でかと存ぜられます。このやうな事を申すのは、釋迦に説法のたぐひかは存じませんが、やむにやまれぬ私の心から、失禮も何も打忘れて申しあげるのをごさいます。どうぞ、その邊をよくよく御考へ遊ばして、叔母様の御言葉に従つて程よき御勉強を遊ばすやう、當分夜なども

早くお休みあそばし、朝々は例の深呼吸なりと御厲行なされ、そして、一日も早くもとのやうな御壯健の御身體におなり遊ばすやう、切にお願いひ申します。さやうなら。

\*貴族院議員、  
文學博士。

三一 小事とは何ぞや

澤柳政太郎

辛うじて眼に見ゆるほどの小さきとげも激しき苦痛を生じ、顕微鏡にてらさざれば見るべからざる細菌も、恐るべき疾病の根源となる。少量のモルヒネも人命を奪ふに足るべく、一本のマッチも大廈を焼

くに足れり。一片の雪は輕けれども、降りつもつては山を埋むる積雪となり、雪崩となりては家屋を倒し、人畜を害ふ。雨滴は小なれども、降續けば橋梁を墜し、堤防を破り、田畑を流すことあり。雲かとまがふ満山の櫻花も、小さき花瓣の集りたるものにあらずや。

朝寢のために遅刻したるを、家に用事ありしたためなりといひ、怠惰にて缺席しながら、病氣のために休みたりなどいふ。何れも小なる虚言たるに過ぎず。されど、小なる虚言は大なる虚言のはじめなり。他

人の物を竊かに隠す等の悪戯も、癖となりては、詐偽、  
竊盜をも敢てするに至るべし。隣席の生徒の落し  
たる鉛筆も、氣附かば、拾ひやるべし。道を問ふもの  
あらば、深切に教へよ。善を爲したるとき快く感ず  
る心は、更に他の善を爲さんとする力となり、善を樂  
しむ心となる。大悪は小悪より成り、大善も小善に  
始る。  
小悪の恐るべきは細菌の恐るべきがごとし。赤痢  
の一細菌人體に入るに、體内に抵抗し殺菌する力な  
きときは、忽ち繁殖して大患となり、遂には生命を奪

ふに至る。過つて一の小悪事を犯せば、深く其の非  
を悔悟して、堅く將來を警むべし。若し口實を設け  
てその悪を蔽ふが如きことあらば、恰も體内に入り  
し細菌の抵抗を受けざるが如く、知らず識らずの間  
に増長して、遂に悪人となるに至るべし。  
人の一生は小事の連りて成れる鎖なり。其の中の  
一小環の強弱は全體の強弱に影響するものなり。  
小事に注意深き者は成功し、然らざる者は失敗す。  
眞に大志ある者は克く小物を勤め、眞に遠慮ある者  
は細事を忽にせず。短き鉛筆も、一枚の紙も、一錢の

銅貨も粗末に取扱ふべきものにあらず。天下の大事は必ず細事より成ると云ふにあらずや。

伊太利の數學者

伊太利の理學者

英國の理學者  
英國の機械家

古今の大發明家は、何れも小事より研究の緒を開きたる者なり。ガリレオの振子の發明は、釣ランプの風に搖らるゝを見たるに始り、ガルヴァニの電信機の發明は、蛙の足の痙攣を認めたるより來れり。其他、林檎のニュートンに於ける、鐵瓶の蓋のワットに於ける等、皆些事より大發明・大發見の起りたるを證するものなり。 (中學修身書)

三二 あげひばり

手をついて歌申し上ぐる蛙かな。 山崎宗鑑  
 青麥や、雲雀があがる、あれさがる。 上島鬼貫  
 苗代や、二王のやうな足の跡。 志田野坡  
 夜被を着て歩いて見たり、土用干。 榎本其角  
 明月や、池をめぐるて、夜もすがら。 松尾芭蕉

道とへば、一度にうごく田植笠。  
武者ひとり叱られて居る土用ぼし。  
額文字の筆法、頤ではねてほめ。

近江の人、和歌連併の名家。

攝津の人。

越前の人、藍門十哲の一人。

近江の人、江戸に住む、蕉門十哲の一人。

呼ばれても、二針三針ぬつてたち。

「通り抜け無用で通りぬけがしれ。」

三三 漢字の音訓

漢字の我が國に入りし時代は詳ならざれども、支那との交通は前漢の頃より開けたれば、その文字も當時傳來せしなるべし。然れども、未だ廣く學習するには至らざりしものの如し。その後、新羅百濟等との往來頻繁となりしより、漢字も亦かの地方より傳來し、應神帝の時には、百濟の博士來りて、皇子に書を

授くることとなりし程なれば、學習の道も當時漸く開け、流行も漸く廣がりしことと見えたり。されば、我が國にて、學者の始めて學習せし漢字音は百濟音なり。百濟音は、蓋し、支那南方の音の傳りて多少變化したるものなるべし。

又、我が國と支那との交通は、唐宋以後に至りて、次第に盛になりしかば、我が國人は支那南方に行はれし漢字音を讀習ひて、之を傳へたり。されば、漢字傳來の初に於て、我が國人の學びたる漢字音は、百濟音と支那音との兩様なりしが、兩者とも大概相似たるも

儒書

佛書

論語

孟子

詩經

易經

のにて、均しく支那南方即ち所謂吳の地方の音なりしかば、等しく之を吳音と云へり。

推古帝以後、隋唐と交際を開くに及びて、遣唐使・留學生、率ね其の都長安に赴きて、その音を傳へたり。之を漢音と云ふ。長安は漢土の本部なるを以て此の名あるなり。

吳音・漢音は、字ごとに必ず異なるには非ざれども、同じからざるものも頗る多し。遣唐使・留學生の勢力を得るに従つて、漢音を獎勵すること盛になり、特に音博士といふを置きて、専ら彼の國本部の原音を學

ぶことを獎勵したり。然れども、吳音は早く我が國に傳來し、久しく國人の口耳に慣れたれば、儒書は大概漢音を以て讀むこととなりたれども、佛書は多く吳音を以て讀み、その他は漢音・吳音を雜へて讀むこととなりたり。されば、後世に至りても、普通の言葉には、吳音を用ふること極めて多し。

例 右は吳音  
左は漢音

金 <small>コウ</small> 剛	人 <small>ニ</small> 本	強 <small>ゴウ</small> 情	名 <small>ミナ</small> 聞	木 <small>キ</small> 權
錢 <small>セン</small> 剛	物 <small>モノ</small> 本	強 <small>ゴウ</small> 情	名 <small>ミナ</small> 聞	木 <small>キ</small> 權
物 <small>モノ</small> 穀	家 <small>ケ</small> 來	去 <small>コ</small> 過	武 <small>ブ</small> 者	會 <small>エ</small> 釋
價 <small>ケン</small>	事 <small>コト</small>	退 <small>タイ</small>	士 <small>シ</small>	合 <small>カフ</small>

吳音・漢音既に行はれたる後に於て、宋より以來、彼我



僧侶などの來往せしもの、更に彼の國の音を傳へたるものあり。之を唐音タウオンと云ふ。唐音といふは、我が國にては支那を唐代以後もなほ唐と稱せしを以てなり。唐音の使用はある少數の文字に止りて、一般に行はれたるには非ず。

例 行燈アンテン 甲板カバン 胡亂ワラン 蒲團フワン 亭テイ 鈴リン

近時支那との交通頻繁となるに従つて、又支那現今の北京音を傳へたり。之を支那音シナオンと云ふ。これも支那の地名等に用ふるのみにて、多くは行はれず。

例

\*  
又官話音とも云ふ

上海シヤンハイ 芝罘チイフ 太沽タイコ 牛莊ウチウ 哈爾濱ハルビン

右の百濟音、吳音、漢音、唐音、支那音等を一括して字音ジオンと云ふ。但し、普通に字音といふは、主として吳音、又は漢音のことなり。

漢字には音の外に訓有り。訓とは、漢字に固有の國語を當て、讀みたるものなり。漢字の訓は、始めて漢字を讀み、その字義を譯せしより以來、數千人の手を借り、數十百年を経て、漸次に定りしものにして、一人一代に成りしものに非ざれば、是が創始の時を指示すること能はず。

訓には正訓あり。意訓あり。正訓とはその字の本義のまゝに國訓を附したるものにして、

日<sup>ヒ</sup> 月<sup>ツキ</sup> 山<sup>ヤマ</sup> 川<sup>カハ</sup> 草<sup>クサ</sup> 木<sup>キ</sup> 鳥<sup>トリ</sup> 獸<sup>ケモノ</sup>

の如きは一字に正訓を附したるもの、

從弟<sup>イトコ</sup> 伯父<sup>オヤジ</sup> 海苔<sup>ノリ</sup> 刷毛<sup>ハシ</sup> 所以<sup>ユエニ</sup> 私語<sup>シゴト</sup> 加之<sup>ソコニ</sup>

牽牛花<sup>アサガハ</sup> 燕子花<sup>カキコ</sup>

の如きは二字又は、二字以上に正訓を附したるものなり。近來漢字に西洋語の訓を附するものあり。

隧道<sup>トンネル</sup> 燐寸<sup>リンセン</sup> 唧筒<sup>シリンダ</sup> 麵包<sup>パン</sup>

これ亦正訓に屬す。

意訓とは、漢字に、その字の本義にあらざる國語を、意を以て當てたるものにして、

子<sup>コ</sup> 丑<sup>ウシ</sup> 寅<sup>トラ</sup> 卯<sup>ウサギ</sup> 辰<sup>リウ</sup> 巳<sup>ミ</sup> 午<sup>ウマ</sup> 未<sup>ヒツシ</sup> 申<sup>ササギ</sup> 酉<sup>トウ</sup> 戌<sup>イヌ</sup> 亥<sup>カ</sup>

の如きは、一字に意訓を附したるもの、  
草臥<sup>クサヒ</sup> 七夕<sup>セチヤ</sup> 團扇<sup>ウチハ</sup> 流石<sup>ササガ</sup> 五月蠅<sup>ウケムシ</sup>

の如きは二字又は、二字以上に意訓を附したるものなり。十二支の字は、もと動物の名に非ざれども、後に十二支に動物を配當せしによりて、此等の字をネウシ・トラ・ウなどと呼ぶこととなりしなり。又、タナバタ(棚機)といふ國語と七夕といふ漢語とは全く同

じきものに非ず、ウチハ（打羽）といふ國語と團扇といふ漢語とはもと異なれども、實物又は事からの大概相似たるより、意を以て之に當てたるものなり。

又「飛鳥の明日香」といふひつらねの有るより、いつしか飛鳥の字をアスカと讀みならはし、「春日の加須賀」といふひつらねの有るより、春日の字を遂にカスガと讀むに至りたる如きも、亦意訓の類に入るべし。  
（漢字要覽に據る）

三四 皇室に關する敬語

我が皇室儼として萬民の上に位し、人民を視給ふこと慈母の赤子に於けるが如し。故に、國民尊崇の念溢れて、言語の上にあらはれては、皇室に關する敬語となれり。皇室に關する敬語に種々あり。皇室典範に定められたるものあり、古より慣用せるものあり。皇室典範には、その第十七條に「天皇・太皇太后・皇太后・皇后の敬稱は陛下とす。同十八條に「皇太子・皇太子妃・皇太孫・皇太孫妃・親王・親王妃・內親王・王・王妃・女王の敬稱は殿下とす」とあり。

古より慣用せるものにはその類頗る多く、用ひかたも様々あり。今、序を逐うて之を述べん。天皇、天子、皇帝、陛下、聖上、至尊、主上、上上様、御上、今上、御門、現津御神、大元帥は皆天皇を稱し奉る語なり。令に「天皇は詔書に稱する所、天子は祭祀に稱する所、皇帝は華夷に稱する所、陛下は上表に稱する所」と見えたり。大元帥は陸海軍を統帥し給ふ上に就きて申し奉る。乘輿、鳳輦、鸞輿は御輿なり。車駕、龍駕は御車なり。天皇の行幸を、車駕某の地に行幸し給ふといふが如きは、これ天皇を直ちにさすを憚りて、乘輿

に託して云ふなり。行幸、臨幸は天皇の皇居を出て、他所に行き給ふをいひ、その皇居に還り給ふを還幸、還御といふ。鹵簿は車駕の次第なり。三后、皇太子、皇太子妃の他所に行き給ふを行啓と云ひ、その還り給ふをば還啓といふ。宮城、禁裏、禁中、禁闕、禁廷、禁門、鳳闕、御所、内裏、九重は皆皇居を稱する語なり。他所に行幸し給ひてしばしおはします所を行宮、又は、行在所といふ。又、他所に留り給ふことを駐蹕、駐輦といふ。詔書、敕書、上諭、敕語、敕諭、敕命、綸旨、綸言、宣旨は皆天皇の御言宣なり。明治四十年に公式令を定

めて、詔書・敕書・上諭等の別を明らかにせらる。皇族の命をば令旨と稱す。叡感・天聽・天覽・叡覽・叡慮・宸慮・聖慮・宸襟は天皇の御感・御聞見・御思慮を稱する語なり。乙夜夜十時の覽とは天皇御政務の御暇に書見し給ふをいふ。天位・宸極・高御座・大御座・九五の位・寶祚は天皇の御位なり。天皇崩じ給へば、皇嗣乃ち踐祚して祖宗の神器を承け給ひ、大喪はて、後、即位の禮を行ひ給ふ。聖德・聖鑑・聖威・天威・聖恩・天恩・乾德は天皇の御徳に關する語なり。皇后の御徳をば坤徳といふ。

天顔・龍顔・玉體・玉步・玉座・便殿は天皇の御容貌・御動作・御座席に關する語なり。政治に勉勵せさせ給ふを宵衣・旰食し給ふといひ、出入し給ふを出御・入御といふ。衰龍の模様ある御衣を衰龍の御衣といひしより、常の御衣裳のことにも轉用す。欽定・裁可は御裁定なり。寶算・聖壽は御齡なり。御宇・御治世は御世なり。宸翰・宸筆は御書なり。御盃を天盃といひ、御詩歌を御製といひ、三后以下のをば御歌・御詩といふ。天皇の御機嫌を天機といひ、三后以下のを御機嫌といふ。東宮・春宮は皇太子を稱し、竹の園生・竹園・金枝

玉葉は皇族を稱する語なり。皇子孫の生れさせ給ふを降誕といひ、皇女の臣下に嫁し給ふを降嫁といふ。是等の敬語の中には、我が固有の語に漢字をあてたるものあり。現津御神の如き、是なり。或は漢語をそのまゝ用ひたるあり。陛下至尊の如きは、是なり。或は古用ひ、今多く用ひざるあり。内裏禁裏の如き、是なり。或は古になくして今あるものあり。大元帥の如き、是なり。かく様々なれども、要するに、均しく皆尊崇の語なるなり。之を外國語に比するに、固

より日を同じうして語るべからず。これ我が皇室の尊嚴なる所以なり。されば、我等國民たるものは、是等の敬語を常に能く心得置くべし。濫稱・妄用して、かりにも不敬に陥ることあるべからず。(國語教程)

大正八年二月十二日  
文部省檢定  
高等女子學校國語教科書

四訂女子國語讀本 全十册

行發	初版	日三	月一	年五	十三	治明
行發	再版	日六	月二	年五	十三	治明
行發	三版	日七	月二	年六	十三	治明
行發	四版	日九	月二	年七	十三	治明
行發	五版	日九	月二	年九	十三	治明
行發	六版	日七	月八	年十	十四	治明
行發	七版	日十	月三	年十	十四	治明
行發	八版	日一	月三	年十	十四	治明
行發	九版	日二	月三	年十	十四	治明
行發	十版	日二	月三	年十	十四	治明
行發	十一版	日二	月三	年十	十四	治明
行發	十二版	日二	月三	年十	十四	治明
行發	十三版	日二	月三	年十	十四	治明
行發	十四版	日二	月三	年十	十四	治明
行發	十五版	日二	月三	年十	十四	治明

大正九年  
定價  
卷一、二、三、四、九、十  
各金六十一錢  
卷五、六、七、八  
各金五十一錢



定價  
卷一、二、三、四、九、十  
各金參拾六錢  
卷五、六、七、八  
各金參拾錢

發賣所  
賣捌所

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍株式會社  
各府縣特約販賣所

著者 同 同 同  
發行所 兼 者 者  
代表者 者 者  
印刷所 者 者

吉田彌平  
小島政吉  
篠田利英  
岡田正美  
東京市日本橋區本町三丁目十七番地  
金港堂書籍株式會社  
原亮一郎  
東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
東洋印刷株式會社

四訂女子國語讀本卷三

一八二

四訂女子國語讀本卷三終

高橋電子

